

第三帝国敗退最終局面とハンガリー・ユダヤ人の悲劇 ——1944-1945大量殺戮の歴史的文脈——

永 岑 三千輝

目次

はじめに

1. 前史
2. 解放・同化過程のユダヤ人
3. 第一次世界大戦後ハンガリーの危機と反ユダヤ主義
4. 大学入学定員制限等のユダヤ人差別の進展
5. 1937年までの反ユダヤ主義政策
6. 1938年から41年までの反ユダヤ主義政策
7. 独ソ戦への参戦とユダヤ人殺戮
8. 世界大戦下の窮状と反ユダヤ主義政策の展開 1942-43
9. ドイツ占領下に陥ったユダヤ人
10. ゲッター化——短期集中的に完了——
11. 追放の第一段階（1944年5月～7月）
12. 非ユダヤ人住民の対独協力と致富
13. 移送の停止
14. 追放の第二段階（1944年10月～45年4月）

むすびにかえて

地図（VEJ 15）——ハンガリーとその占領地域 1938年～1941年

文献

はじめに

われわれはヒトラー・ナチス・第三帝国の人種主義的民族帝国主義の歴史のなかでユダヤ人迫害・殺戮の段階的累進的過激化を見てきた(永岑2021, 2022)。そこで簡単に触れたことだが、敗退過程終末期、すなわち1944年春から夏にかけて、殺戮の嵐がハンガリー・ユダヤ人を襲った(VEJ 16:38-40)。なぜこの時期なのか。なぜ、この時期までハンガリーのユダヤ人は殺害をまぬかれたのか。ここに至る経過はどのようなものであったのか。なぜ、8月で大量殺戮は停止になったのか。本稿では、欧米の研究成果を踏まえた本格的な最新史料集『ナチス・ドイツによるヨーロッパ・ユダヤ人の迫害と殺戮』全16巻の一冊で最後に刊行された第15巻(2021年刊)「ハンガリー 1944 - 1945」に依拠して、この歴史的経過の主要な諸要因を確認しておきたい。この史料発掘とその解釈という歴史学の基本的営為の積み上げによって、さまざまな歴史現象について、とりわけホロコーストをめぐる「起こったことの歴史的な理解と解釈」を客観的なものにして行き、残り続けているとされる「歴史的な理解と解釈の核心にある不透明さ」(ストーン2019)を根底的に払拭するのが、歴史研究の本道であろう。「ホロコーストの専門家ではない」、「ナチズムとヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅に関する問題についての専門の研究者ではない」人々の表象の限界(フリードランダー1994)を打ち砕いていくのは、あくまでも実証的歴史研究の積み重ねしかないであろう。そして、その正確な歴史科学的認識の社会への広く深い浸透であろう。

第三帝国により殺害された600万人のヨーロッパ・ユダヤ人の圧倒的多数(ほぼ400万人以上)は、1944年3月にはすでに殺害されていた(永岑2021, 2022)。この時点は第三帝国の軍事的敗北が歴然としていた。ソヴィエト赤軍はドイツ国防軍を追撃してハンガリー国境に迫り、44年2月中旬、ウクライナ北西部を防衛していたドイツ第一装甲軍がカメネツ＝ポドリシ

キーで赤軍に包囲され、散々な目にあっただろうじて脱出するような状態であった。枢軸国側からルーマニア、次いでブルガリアが脱落していく。

1944年3月19日に始まるドイツのハンガリー占領とともにヨーロッパに残る最後の大きなユダヤ人共同体の絶滅が始まった。ハンガリー政府は親衛隊(SS)と協力して短期間のうちにハンガリー領土中核地域¹およびハンガリーが占領ないし併合した地域から40万人以上を追放した。彼らのほとんどはアウシュヴィッツ・ビルケナウ到着後すぐにガス室で殺害された。アウシュヴィッツにおける大量殺害の情報が世界に漏れ出て(VEJ 16:46-50)、摂政ミクロシュ・ホルティが44年夏に国内からのそしてそれ以上に外国からの圧力に屈し、追放を停止させたとき、ハンガリーで生き残っていたのはブタペストのユダヤ人と労働奉仕に駆り出されていたユダヤ人男子だけであった。

だが、サーラシ率いるハンガリー・ファシストの矢十字党が10月に権力を掌握すると、直後に追放が継続され、ドイツにさらに7万6000人のユダヤ人を引き渡した。ハンガリー統制下諸地域で殺害されたユダヤ人は45年5月までに50万人を超えるというのが今日の評価である(VEJ 15:13)。

1920年から大量殺戮の1944年まで、ホルティ支配下のハンガリーにおける反ユダヤ主義はどのように展開したのか。オーストリア＝ハンガリー帝国の最後の提督だったホルティ²は第一次世界大戦後の1919年、ハンガリー革命に反対し、反革命の国民軍を組織し、8月共産主義政権を打倒した。すなわち、反革命・反共産主義の点でドイツの多様な保守勢力、ヒトラー・ナチズム、ムッソリーニ・ファシズムと思想的政治的共通項を持っていた。

¹ ドイツ語でKernland。第一次大戦による領土縮小、第三帝国との同盟による領土拡張といった国際的権力関係による変化を受けなかった中核的領土。

² 1919年8月9日、大方は将校および下士官からなる約1000人によって国民軍なるものが形成された。ホルティがこの国民軍の最高指揮者。中貴族の家の出身で、約600ヘクタールの地主。国民軍はフランス占領下のセゲドの野営地を発して、ルーマニア人に占領されていないドナウ河の西側へと向かった。行軍中、いたるところで流血の惨事を引き起こした(ジュルコー 1985, 32-33)。

彼は共産党の活動を禁止し、1920年ハンガリー王国国民議会の諸党派——共通基盤は反共産主義——の支持を得て、摂政に任命された。同年6月トリアノン条約に調印してハンガリーの主権を回復するとともに、革命派を徹底して弾圧した。他方、ハプスブルク家（カール4世）の復位に反対し、国王不在の摂政として国家元首となった（VEJ 15:13）。

摂政ホルティのもとでのハンガリー諸政府は1944年ドイツに占領されるまでさまざまな反ユダヤ立法を行い、たくさんの反ユダヤ指令を発していた。39年の第二ハンガリー防衛法ではユダヤ人男子に軍事的労働奉仕を課した。41年6月27日、ハンガリーはソ連に宣戦布告した。41年夏の間、1万8000人から2万1000人のユダヤ人——そのほとんどはハンガリー国籍を所有していなかった——をドイツ占領下のウクライナに追放した。彼らのほとんどはカメネツ＝ポドリスキーで射殺された（*Enzyklopädie* [1990], 731f）。さらに42年1月、ハンガリー部隊はノヴィ・サド（セルビア北部の都市）とその周辺——ハンガリーの手に落ちたユーゴスラヴィアの地域——で3300人から3500人の婦人、男子と子ども——ほとんどがセルビア人——を殺害した。この中には700人から1000人のユダヤ人も含まれていた（VEJ 15:13）。

反ユダヤ的な諸措置はすでにドイツにおけるナチス支配確立以前にハンガリーにおいて権威主義的保守主義的政策の構成要素となっていたが、ドイツが占領するまでは国内のユダヤ人を追放や殺害からは守っていた。反ユダヤ立法の下にもかかわらず、ハンガリー議会には1941年になってもユダヤ人の血統を持つ者が11人おり、そのうち洗礼を受けたものが8名いた。その上、7万人近くの外国（特にポーランド）のユダヤ人がハンガリーに逃げ込んでいた。ハンガリー指導層は自国領土拡張のためにドイツ陣営に加わった日和見主義者であった。親独派と「しぶしぶ協力」派との政権が短期間に入れ替わった。北（チェコスロヴァキア）、東（ルーマニア）、そして南（ユーゴスラヴィア）への領土拡張をドイツの助けを借りて実現していったが、それに応じてドイツ側の期待と要求も大きくなった（ヒルバー

グ[1997]下, 96-99)。

1944年3月19日のドイツ進駐後に任命された親独派ストーヤイの新政府は、ハンガリーのユダヤ人が一縷の望みをいだいてあてにしていた状況に終止符を打った。新政府は進んでドイツ関係当局——特にアドルフ・アイヒマン指揮下の特別出動部隊 (Sondereinsatzkommando) ——とユダヤ人のゲッター化や追放で協力した (VEJ 15:14)。

1. 前史

1944年の事態を把握するには、反ユダヤ主義の長期的歴史を概観しておくことも必要であろう。反ユダヤ主義がどのような政治・経済・宗教等の諸条件の下で、どのように発現するのかを俯瞰的に把握するためである。

ユダヤ教徒はおそらくはローマ帝国の当時パンノニアと呼ばれた地方にハンガリー人が移住し占拠・定住する以前に住んでいた (ハウマン 1999)。1000年のキリスト教ハンガリー国家創立後、ユダヤ人が立法で最初に言及されたのは1092年であった。この法律でユダヤ人と非ユダヤ人の結婚が禁止された。しかし、14世紀までユダヤ人はカルパト盆地で比較的安全に暮らしていた。西欧や中欧のユダヤ教徒と違って、誰も迫害されることはなかった。低開発で人口希薄な農業王国はユダヤ人の商人、手工業者、金貸しに依存し、14世紀までユダヤ人難民を受け入れた。アンドラーシュ2世 (1205-1235) とベーラ4世 (1235-1270) は重要な政治諸官庁にユダヤ人を登用するまでになった。ベーラ4世はその上、ユダヤ人の強制洗礼を禁止し、1251年にはユダヤ人に王の保護を保障した。この時からユダヤ人は王室奉仕者となされ、王への納税を義務付けられ、人的物的保護を享受することとなった。それによってベーラ4世はモンゴル襲来 (1241/42) 後の荒廃した王国の再建にユダヤ人の支援を確保した (VEJ 15:15)。

14世紀にハンガリーのユダヤ人を取り巻く状況は悪化した。ハンガリー王国ルートヴィヒ1世 (1342-1382) は王権を強化し、自国をヨーロッパ

の大国の地位に引き上げようとした。ドイツ騎士団のリトアニアへの出征に参加し、ヴェネツィア共和国に対する戦争でダルマチアを手に入れるなどした。彼はキリスト教への改宗を拒否したユダヤ人を4年間、国外追放に処した。ジギスムント王（1387-1437）はベーラ4世の自由保証認可状を更新したが、ユダヤ人は衣服に標識として黄色のしるしをつけることを義務付けた。また王都ブダで商業を営むことも禁止した（VEJ 15:15）。

15世紀後半、マティアス・コルヴィヌスの治世（1458-1490）にユダヤ教共同体は、最初の繁栄期を経験した。すでに15世紀末には、24の諸都市にユダヤ教共同体があった。だが、彼の死後、ユダヤ人敵視が再び巻き起こり、最初の儀式殺人の訴えが出現した。1494年、トルナヴァ（現在、スロヴァキア西部の都市）でキリスト教徒の子ども一人が行方不明になり、12人のユダヤ人が火刑に処された。1529年にはバジンで30人のユダヤ人が9歳の子どもの殺害の罪を問われ、火刑に処された。実際に、フェレンツ・ヴォルフ伯爵はユダヤ人に負っている負債をこのやり方で片付けようと、子供をウィーンに連れ去らせた。処刑が終わった後、子供は無事に帰還した（VEJ 15:15）。

16世紀、オスマン帝国がハンガリーに勝利し、ハンガリー王国は没落、ハンガリーはオスマン帝国領ハンガリー、トランシルヴァニア公国（ジーベンビュルゲン侯国）、王領ハンガリーの3つの地域に分割された。ユダヤ人の運命はこの三つの部分で非常に違った。オスマンに占領されたブダから当地に住んでいたユダヤ人がオスマン帝国に連行されたが、すぐに新しいユダヤ人家族が町に入って来た。その結果、ブダのユダヤ教共同体は16世紀後半、ヨーロッパで最も重要なものとなり、三つ以上のシナゴグを持つに至った。トランシルヴァニア公国（ジーベンビュルゲン侯国）ではベトレン・ガーボル（1613-1629）がユダヤ人に商業と宗教行為の自由を保証した。しかしながら、残余のハンガリー王国は今やハプスブルク帝国の一部となり、繰り返しポグロムが起きた。1529年と1536年にブラチスラバとトルナヴァでは男女子供が火刑に処され、生き残った者は追放され

た (VEJ 15:15-16)。

オスマン帝国とハプスブルク帝国との戦争、その後続くハプスブルク支配に対するクルツク (ハンガリーの貧窮化した弱小貴族や農民) の反乱は全土の人口を減少させた。オスマンの追放とともにハンガリーのユダヤ教共同体の大部分が消滅した。そのメンバーは殺害されるか、暴力を避けて逃げ去った。1735年から1738年の最初のユダヤ人家族調査によれば、ハンガリーの2500人のユダヤ人家父長のなかで、1700年以前にハンガリー領土で生まれていたものはわずかに358人であった。ローマ・カトリック大司教コロニヒスが17世紀に完全にハプスブルク君主国に統合されていた王領ハンガリーへのドイツ人の入植に関心をもち、ハンガリーの大貴族 (マグナーテン) がユダヤ人を領内に定住させるとともに、ハンガリーにおける新たなユダヤ人定住の段階が始まった。とりわけベーメン、メーレン、ドイツ帝国から、またポーランドからも、ドイツ語を話すユダヤ人がハンガリーに移住した。彼らはしばしば農産物商人として活動した (VEJ 15:16)。

ユダヤ人移民の過半数は彼らの出身国近くに定住した。西ヨーロッパ出身のユダヤ人は西部地域に、ポーランド出身者は東部地域に。どちらのグループもアシュケナージだったとしても、東部と西部では経済的・社会的・文化的には大きな違いがあった。ハンガリー身分制国家ではユダヤ人は外国人として取り扱われた。18世紀中ごろまで諸都市や土地所有者が、自らの領域や土地への定住をユダヤ人に許可するかどうか決定した。大貴族、中小貴族、教会などの土地で生活するユダヤ人は、土地所有者に「保護金」を、郡県 (Komitate) に租税を支払わなければならなかった。その見返りに彼らは一定の特権を獲得した。マリア・テレジア (1740-1780) のもとで特別税が導入され、ユダヤ人は遂に特別の法律や特権で禁止されていないところであればどこにでも定住する権利を得た。ただし、ユダヤ人に引き続き定住を拒否した幾つかの郡県や都市の抵抗にあった。定住禁止はようやく1840年に廃止された (VEJ 15:16-17)。

啓蒙絶対主義の擁護者であったヨーゼフ二世（1765-1790）はユダヤ人の状態を改善しようと努力した。彼は最終的に1782年、ユダヤ人に王国全土で定住許可を与え、自由な宗教行為の権利を与え、多くの職業部門、軍、学校をユダヤ人に開放し、認可改宗者には農耕地取得を認めた。彼は同時にユダヤ教共同体に学校の設立とドイツ語習得を義務付けた。彼の諸改革は同化を推進し、改宗への準備を強化する目標を持っていた。こうした18世紀の諸改革はハンガリーのユダヤ人住民の発展を助けた。1735年には王国に総数1万2219人のユダヤ人が生活していたが、その数は1787年にはすでに8万3000人に増加した。1805年のハンガリーには13万人（総人口の1.5%）のユダヤ教徒が住んでいた。1910年国勢調査ではユダヤ教徒、すなわち「イスラエル宗教共同体」に属するものが91万人（総人口の5%）になっていた。ブダペストではその割合が23.1%に達した（VEJ 15:17）。

2. 解放・同化過程のユダヤ人

19世紀のハンガリーは民族的に多様であった。今日の領土でいえばシーベンビュルゲン、スロヴァキア、カルパト - ウクライナ、およびクロアチアの一部を含んでいた。土地を所有する貴族階級が国家政策を規定していた。大貴族が国家運営の要職を掌中にしてはいたが、官僚や将校団は19世紀後半になると一部が貧窮化した貴族階層が占めるようになった。彼らは彼らの以前の社会的地位にしがみつき、上層階級の生活様式を保持した。同時に彼らはブルジョア階級——ハンガリーでは特にユダヤ系やドイツ系の人々——の台頭に不信感や反感をもっていた。しかし他方で、国家の多民族的構成からして貴族上層部は19世紀のハンガリー国民国家形成のためには、農業的な社会を経済的に近代化すること、政治的文化的にハンガリーのために貢献する積極的な同盟者を必要としていた。ハンガリーの支配階級はこのような経緯からとりわけユダヤ人ブルジョア階級に依存し、彼らの同化を急ぎ立てた（VEJ 15:17-18）。

ハプスブルク支配に対する1848年3月の革命勃発の際、革命家たちは12か条綱領のなかで全市民と全宗教の法の前の平等を要求した。しかしながら、ハンガリー革命のリーダー、ラヨシュ・コシュートは、ユダヤ人の解放を二つの要求と結びつけた。ユダヤ人は同化しなければならず、彼らの宗教を近代化しなければならない、と。ハンガリー・ユダヤ人の革命運動への積極的参加はこれらの要求を実行に移す前向き姿勢の証拠と見なされた。1849年7月28日、ハンガリー議会はハンガリー・ユダヤ人の同権法案を満場一致で可決した。しかし、この法律は革命鎮圧により、当面何の政治的成果ももたらさなかった。やっと1867年になって、ユダヤ人にブルジョア的存在を妨げてきたすべての指令が廃止され、1895年に「イスラエルの信仰」が国家的に保護された宗派として承認された。このときからキリスト教徒がユダヤの信仰に改宗するとも可能となった (VEJ 15:18)。

ハンガリー王国のユダヤ人の一部にとってはこのプロセスは未曾有の文化的経済的飛躍の道を拓いた。それは特に都市の改革志向的ユダヤ人の忠誠意識と愛国心を強化した。彼らは「改革者」(Neologie) の名で正統派から次第に距離をとった。遂に1868/69年のユダヤ教全国会議でハンガリーのユダヤ教徒は改革派、保守正統派、「現状維持」の穏健伝統派の潮流に分裂した。改革派共同体は改革を推進し、正統派衣服規則を放棄し、多くの分野で非ユダヤ系住民に順応した。正統派はこれに対して彼らの伝統的規則と文化的アイデンティティを守った。「現状維持派」共同体は一義的には自らの位置を決めず、正統派にも改革派共同体にも加わらなかった。1930年、当時のハンガリー領土内でユダヤ人の65.5%が改革派、29.2%が正統派、「現状維持派」共同体に5.3%が加わっていた (VEJ 15:18-19)。

たくさんのユダヤ人は政治システムが彼らを反ユダヤ主義からまもってくれると確信し、国家とハンガリー政府——反ユダヤ的な事件を公に厳しく批判した——に対する忠誠を強化した。1880年代初頭、反ユダヤ主義の事件が勃発し、ポグロムの暴力沙汰が発生することもあったが、当局は暴力行為を断固として規制した。80年代に生まれた小さな反ユダヤ主義政党

は、ハンガリー王国における1890年代の全般的な経済成長の中で影響力を喪失した。ハンガリー政府の態度と19世紀末葉の自由主義的政策はオーストリア・ハンガリー君主国のハンガリー語地域のユダヤ人に同化を志向させることになった。ハンガリー・ユダヤ人の過半数は国の統合的構成員と自認し、ハンガリー国家を公然と支持するに至った。ユダヤ人の多くが自分の名前をハンガリー化（マジャール化）し、ハンガリー語を習得した。その結果、1910年には母語をハンガリー語ではないとするハンガリー・ユダヤ人の割合は24%しかなかった（VEJ 15:19）。

特に過半数が改革派共同体に属していたユダヤ人エリートは、同化理念に共鳴していた。同化が重要な経済的社会的有利さと結びつき、多くの場合に社会的階層上昇を促進したからである。1910年には民間の医師の62%、弁護士の45%、ジャーナリストの42%がユダヤ教共同体に属していた。しかも、若干のユダヤ人家族は大ブルジョア階級に上り詰めた。だが、ほとんどのユダヤ人は中産階級であった。1914年にはユダヤ人兵士も出征した。しかし、第一次世界大戦が総力戦化し、その苦境をそらそうとする反ユダヤ主義扇動家の活動が活発化して、ユダヤ人兵士の逃亡運動も引き起こした。ユダヤ人は公的議論でますます強くなる反ユダヤ主義、その暴力やユダヤ人敵対的政策の過激化を恐れた（VEJ 15:20）。

3. 第一次世界大戦後ハンガリーの危機と反ユダヤ主義

1918年の敗戦、オーストリア・ハンガリー君主国の解体でハンガリーは深刻な危機に陥った。新しい諸国民国家の成立で国土は相当に縮小し、広大な農業地域、重要な工場と何百万かの職場を失った。わずか2年のうちに8つの政府がたくさんの難題のまえに倒れた。とくに旧王国の領土的崩壊過程が打撃となった。1918年10月反戦諸党（社会民主党、ブルジョア急進派、独立党）で創立されたハンガリー国民評議会は、カーロイ・ミハーイ伯爵の指導のもと、まずはブルジョア民主主義体制の樹立を追求した。

だが、チェコ、ルーマニア、セルビア、フランスの軍隊は11月に調印された休戦協定を無視した。1919年1月以降パリ講和会議の開催中、これら諸国はハンガリーでさらに進軍し、連合国によって決められた休戦ラインを越えた領域を占領し、地域の軍事的紛争を長引かせた。協商国がハンガリーからついに純ハンガリー地域の明け渡しを要求するに至ってカーロイ政府は退陣し、権力を社会民主党に引き渡した。この党は、1919年3月21日、クン・ベラ指導下の共産党と合同してハンガリー社会党を結成した。この新党は共産主義レーテ共和国を宣言した³。しかしこの共和国は数か月後に内外の抵抗により崩壊した（VEJ 15:20-21）⁴。

1919年11月、「国民軍」のトップ、元提督ホルティ・ミクローシュがブダペスト——これ以前数か月ルーマニア軍が占領していた——に進軍した。1920年3月1日、国民議会は彼を期間限定なしで「摂政」に選出した。彼はこの機能で王が権力を再び行使できるようになるまで、王の代理とされた。それによって国民議会は「君主国再建」を定め、ハンガリーはこれ以降も形式的には王国にとどまった。ホルティ体制は特に貧窮化した中小貴

³ 共産主義レーテ共和国は、最初の宣言で地主の土地、工場、銀行、輸送会社の「社会化」を告げた。「二〇名以上の労働者を擁する工場と六〇ヘクタール以上の土地は国有化された。一日八時間労働制が導入され、労働者の賃金が二〇パーセント引き上げられ、医療費が無料となり、疾病手当が採用され…首都では二五万もの人が一部屋に平均七人以上も住みついていたが、一〇万人以上もの人に金持ちの別荘やひろびろとしたアパートが与えられた。…ソヴィエト共和国の新しい選挙法によれば、資本家と聖職者を除く一八歳以上のあらゆる男女は選挙権および被選挙権をもつ」等、実現不可能な諸政策、ユートピア主義。政府は土地を農民に分配せずに国有化した地所に協同組合を作った。農民の大半は革命を自分たちのものと感じなかった（ジュルコー 1985, 23-24）。

⁴ この間の詳しい事情、戦後の激しい政治闘争に関連する膨大な研究・論争については、羽場久み子 [1982]。

族、将校、大土地所有者⁵、とりわけユダヤ人大工業家によって担われ、独立の司法制度、自由労働組合、選出議員を有し、形式的には多数政党システムであった。だが、国家形態は権威主義的保守的性格のもので、摂政と統一党で造られた政府が政治を行った。有権者は国民のわずかのパーセントであった。1920年、選挙権を持ったのは29.8%に過ぎなかった（VEJ 15:21）。

ホルティ選出の数か月の政治状況は、暴力行為によって特徴づけられる。レーテ共和国の存続期間中、「レーニン・ボーイ（Lenin-Jungs）」を名乗る200人ほどの部隊が実際のまたは誤認の коммуニスト体制反対派を迫害した。この「赤色テロル」は幾百人の生命を奪ったが、それは逆に「白色テロル」の正当化として利用された。準軍事的義勇軍の暴力的活動は、社会民主党員、自由主義者、労働者、特にユダヤ人にも向けられた。彼らは情け容赦なく打ちのめされ殺害された。「白色テロル」の犠牲者数に関しては、500人から5000人と見積もりが分かれている（VEJ 15:21-22）⁶。

白色テロルによる暴力に際してはほかのヨーロッパや非ヨーロッパの国々でも芽生えていた「ユダヤ・ボルシェヴィズム」という反ユダヤ主義の物語が露骨に示された。その物語によれば、ユダヤ人とコムニズムの間に不幸をもたらす関連があり、ボルシェヴィズムはユダヤ的現象なのであった。1920年、ある司教はレーテ共和国について、「混じりけのないユダヤ人がそこで仕事だ。ユダヤ人、ただただユダヤ人だけだ」と感情的

⁵ 1920年代、ハンガリーは農業国だった。「人口の三分の二は田舎に住み、賃金労働者の半数は農業に従っていた。田舎にある耕地の四分の一は千人の大土地所有者に属し、そこで四〇万人もの小農民と日雇い農民が働いていたが、彼らの家族を勘定に入れば、それは全人口の二〇パーセントを占めていた。農民の所有地の八五パーセントは、彼らの生計を保つほど作物がとれなかった」（ジュルコー 1985, 17）。

⁶ 「現時点での資料によると、5000人が殺害され、7000人以上が投獄された後に強制収容所に送られ、ソヴィエト共和国が崩壊してから10万人が3か月以内に亡命している」（ジュルコー 1985, 32）。

で一面的な表現を使って反ユダヤ主義の見地からレーテ共和国を非難している。事実、ユダヤ系のたくさんのレーテ共和国指導者がいた。その中にクン・ベーラ (Kun Béla) と人民委員のサムエリ・ティボリ (Szamuely Tibor) とコルヴィン・オットー (Korvin Ottó) がいた。彼らは公衆の目には制度化された「赤色テロル」を体現していた。しかし、クン・ベーラ政府下のユダヤ人はブルジョアジーの一員として迫害され、たくさんのユダヤ人がホルティの反革命運動を支持した⁷。だが、こうしたユダヤ人のことは無視された。「ユダヤ - ボルシェヴィズム」という物語が政治的に道具化された。1920年2月に社会民主党新聞の二人のジャーナリストが殺害されたとき、暴力行為に対する公的批判が大きくなった。こうした事態は特に1919年1月パリで開催の講和会議（国境問題と賠償問題を扱う）の結末に否定的に作用するのではないかと危惧された。したがって、1920年3月ホルティの摂政任命後、彼とその内閣はこうした侵害を抑制することを試みた。だが、反ユダヤ主義は1944年10月まで権威主義的保守的国家の一つの決定的要素であった (VEJ 15:22-23)。

4. 大学入学定員制限等のユダヤ人差別の進展

1920年6月4日に署名されたトリアノン講和条約はハンガリー社会にとって深刻なショックであった（トリアノン条約による領土の大幅な削減については末尾の地図を参照されたい）。ハンガリーはその人口の半数以上が生活する領土の3分の2を近隣諸国（ルーマニア王国、チェコスロヴァキア共和国、オーストリア共和国、セルビア・クロアチア・スロヴェニア王

⁷ その一人、あるユダヤ教徒は、第一世界大戦期の軍功・記念メダル、ドイツ部隊に属した活動を根拠に、1939年に導入された決定によって民間においてユダヤ人に対する諸措置で優遇された。また後年、1942年2月、ホルティに予備少尉のランクの保持と対ソ前線への配置を要望したほどであった。VEJ 15/66, Antrag des Leutnants der Reserve Andor Wiener an Reichsverweser Miklos Horthy (Eing. 18. 2. 1942) .

国)に割譲しなければならなかった。ハンガリーの領土は27万3000平方キロから9万1000平方キロに減じ、人口も1800万から800万となった(ジュルコー1985, 34)。割譲された地域に生活する人々のおよそ3分の1は、言語、血統、文化でハンガリー民族に属すると感じていた。それ以前の数か月、すでに30万人から40万人がこれら割譲地域から領土中核地域に逃亡し、労働市場や大学に押し寄せた。同時に、縮小した国土においてインフレ、失業と貨幣崩壊によって巨大な社会的諸問題と闘わなければならなかったが、医者、官吏、技師を必要とした(VEJ 15:23)。

こうした戦後の劇的変化が競争を先鋭化させ、将来に対する不安や展望喪失感情を募らせ、特定の社会グループを若干の職業分野や大学から排除しようとする声を強化した。排除の対象となったのは特に女性とユダヤ人であった。彼らは近代化の担い手として経済危機状況において特にいけにえとされるのに適していた。そこでは、多くのユダヤ人の進学意欲や上昇志向が非ユダヤ人住民の一部のルサンチマンを強めた。彼らは差別的諸要求のために肉体的暴力すら行使した。彼らは、ハンガリー・ユダヤ人の数がトリアノン条約によって約44万8000人に半減したこと、ユダヤ人もまた戦争の経済的政治的諸結果の下で同様に苦しんでいることを無視した。ユダヤ人が目立っていた諸部門、すなわち、商業と手工業が経済危機の打撃を特に受けていた。こうした前提諸条件の下で、ハンガリー政府は1920年9月26日、大学入学定員制限法を制定し、女性の大学入学を制限するだけでなく、大学におけるユダヤ人学生数——1918/19年に36.4%に達していたが——を6%に制限した(VEJ 15:23)。

当初、当時の宗教・教育担当大臣の法案は第一に女性、レーテ共和国の前衛と支持者に向けられていた。それは大学入学を政治的信頼性と結びつけようと意図するものであった。ユダヤ人に向けられた条項は議会討論過程で初めて法律に入れられることになった。民族主義的な急進的學生団体が大学や街頭で暴力的に行動するなどして、法案の急進化に影響を与えた。學生諸団体のメンバーは戦争終結以後繰り返しユダヤ人が大学構内に

立ち入るのを妨害し、虐待した。こうした暴力沙汰の結果として、大学は幾度も暫時的に閉鎖された。法律の制定後も学生団体は繰り返し大学入学定員制限の諸規定の遵守と厳格化を要求し、まもなく彼らがユダヤ的と認定するものすべてに反対した。彼らは「ユダヤ新聞」に反対するデモを行い、舞台上演を妨害し、銀行や工場での定員制限を支持した。学生団体の多様で過激な要求が政府によって部分的に取り上げられた。1920/21年のテレキ政府は例えば3000人のユダヤ人居酒屋から酒場ライセンスを取り上げた。いくつかの市町村はユダヤ人隔離への最初の一步を決議した。ある町ではユダヤ人は特定の日にしか公衆浴場を利用してはならなかった (VEJ 15:24)。

こうした反ユダヤ的差別が直線的に1944年の大量殺害に結びついたわけではない。1937年のアメリカ・ユダヤ年鑑はハンガリーのナチス・ドイツへの接近と増大する人種主義的反ユダヤ主義について報告している。しかし政府は、「大学入学許可の際に人種原理を導入せよ」という過激な民族主義学生団体の要求、あるいはユダヤ人の文化的隔離を含む「反ユダヤの諸制限の要求」をもって首相に会談を求める矢十字党に対して、会談を拒否するなど、まだ抑制的であった。とはいっても、ユダヤ人学生団体が表明したように、圧迫が高まる中でハンガリーの大学のユダヤ人学生の数は不断に減少した。1932/33年1970人、それが1936年には1180人に。1932/33年に新規に学生登録された538人のうち1936年には356人しか残っていなかった。「貧困と不幸」がその原因であった (VEJ 15/1)⁸。多数のユダヤ人学生が大学入学定員制限と大学における反ユダヤ主義暴力への反応として外国へ移住した。特にイタリア、フランス、オーストリア、チェコスロヴァキア、スイスへ。1921年1000人のハンガリー・ユダヤ人がプラハのドイツ工科大学に、ウィーン大学におよそ700人。外国での大学進学ができない

⁸ The American Jewish Year Book: bericht von 1937 über die Annäherung Ungarns an Deutschland und über den wachsenden Antisemitismus. Ungarn Antijüdische Manifestationen.

者のなかには、展望喪失で自殺するものも何人か出た（VEJ 15:25）。

5. 1937年までの反ユダヤ主義政策

国内のユダヤ人エリートは、特に最大のハンガリー・改革派、バスター・イスラエル教会の信徒は、大学入学定員制限に対していきり立ったが、ハンガリー政府には支持継続を保証し、外国でハンガリーの利益のために、特に国境修正のために力を尽くした。1920年以後の政治的過激化は彼らの忠誠心とユダヤ・非ユダヤの結合という彼らの改革信仰を揺るがせることはできなかった。ユダヤ教共同体の指導的代表者たちはホルティ体制の安定化後、むしろ彼らの控えめな影響力行使の政策を強めた。急進的な人種主義的反ユダヤ主義がベトレン首相（1921-1931）⁹の統治期にユダヤ教団体に対する爆弾テロを何回か行ったが、国家は急進右翼の暴力行為からは距離をとり、責任者に対して司法的手段を執った。人種主義的反ユダヤ主義は政治的風土と社会の中でイデオロギーとしても公的扇動においても引き続き出現していたが、公的政治はユダヤ人に対して穏健になった。ベトレン政府は右翼急進主義グループの弱体化のための最初の一歩を踏み出し、該当組織を繰り返し禁止し、1928年には国際的にしばしば批判された大学入学定員制限条項も修正した。こうした戦術的諸措置の目標は、国際的承認の獲得、経済立て直しのための外国信用の確保、そして国境修正交渉で立場を有利にするためであった（VEJ 15:25-26）。

この文脈が優位の間、すなわち、1930年代初頭までは、さらなる反ユダヤ的立法は制定されなかった。1932年に急進的人種主義的思想で知られていた人物が首相の座を占めたにもかかわらずであった。この人物、すなわ

⁹ ベトレン・イシュトヴァーン（1874 - 1946）は保守系政治家。ハンガリーの経済復興に多大な貢献。1935年、自らが創立した与党を去り、野党側に移る。1943年、44年には、連合国側との友好関係を確立しようとする保守勢力の中心人物。ソ連の捕虜収容所で死去（ジュルコー 1985, 42）。

ちハンガリー極右指導者ゲンベシュ・ジュラ (Gömbös Gyula) はバイチュ-ジリンスキー・エンドレ (Bajcsy-Zsilinsky Endre)¹⁰などと右翼急進主義、人種主義的反ユダヤ主義のハンガリー国土防衛協会 (MOVE) を創立し、ハンガリー国民独立党の創設者ならびに秘密結社 (Bund von Etelköz) の指導的メンバーであった。この組織のメンバーは重要な政治的地位を占め、「ハンガリー人種防衛」の声高な擁護者であった。そして、国の社会的諸問題をハンガリー経済からのユダヤ人排除によって解決することを要求した。「ハンガリー人種防衛」支持者は「新しいハンガリー的人間」が絶対に必要だと強調し、ハンガリーがドナウ川盆地で占める文化と中心的な位置に基づいて「中欧ヨーロッパの諸民族の中で指導的役割を引き受けなければならない」という見解を代表した。ゲンベシュはすでに1920年にすべての職業分野でユダヤ人の数は5%に制限しなければならないと要求し、「ユダヤ人問題は宗教的な問題ではなく、第一級の人種的経済的問題だ」と宣言していた (VEJ 15:26)。

ホルティはゲンベシュを最初彼の急進的思想のために政治的に指導的な地位に据えることを考えなかった。1932年に首相任命に先立って、彼はホルティに反ユダヤ的諸措置を導入しないと約束しなければならなかった。ゲンベシュは最終的に改革派のユダヤ共同体の支持さえ獲得した。彼は彼らを経済的に害しないし急進的な人種主義的反ユダヤ主義の諸措置を導入しないと約束したからであった。首相としての最初の演説で彼は「ユダヤ人に対してオープンに誠実に言っておこう。私は自分の見地を修正した、と。国民の運命共同体を公然と支持するユダヤ人には、私はわがハンガリーの兄弟姉妹とまったく同じように兄弟あるいは姉妹として歓迎したい」と

¹⁰ ハンガリーの独立運動の指導的人物。1920年代、右翼反対派として活動開始。30年代に入ると、次第に親独的な右翼勢力から身を遠ざけるようになり、反独勢力の積極的な組織者となる。1944年3月19日、激しい銃撃戦の末、ゲシュタポに逮捕される。ラカトシュ政府が奮闘し、釈放されるが、すぐに矢十字党のテロリストに探し出され、44年クリスマスに処刑された (ジュルコー 1985, 81)。

(VEJ 15:26)。

すなわち、彼はももとの急進的な人種主義的反ユダヤ主義の諸要求を貫かなかつた。彼は国家の改造を最優先に据えた。彼は国民的統一の党を大衆的政党に再編し、政治や軍におけるエリートの再編や世代交代などを進めた。その結果、1930年代には1890年ころ生まれた世代が前面に出てきた。彼らは二重王国ハンガリーの保守的価値よりもむしろ右寄り思想にアイデンティティをもっていた。この世代がますます指導的地位に進出した。外交政策ではゲンベシュはファシスト・イタリアとナチス・ドイツに接近した。ヒトラーの政権掌握後、彼ははやくも1933年6月にベルリンに赴き、ドイツとの通商協定を締結した (VEJ 15: 26-27)。ホルティばかりか新英派のベトレン・イシュトヴァーン首相まで、自分たちの領土修正案はドイツの援助を得てはじめて実現できると思うに至った。ヒトラーは政権誕生後すぐに表敬訪問したハンガリー首相に対し、「テーブルにつこうとするものは、少なくとも料理を手伝わなければならない」と語った (ジュルコー 1985, 60)。

1934年、ゲンベシュは「ローマ議定書」に署名し、ハンガリー、オーストリア、イタリアの経済的協力を深化させることにした。彼の政策は、次第に彼から距離を執るようになったもっと穏健な保守勢力との紛争をもたらした。35年春の議会選挙で彼は勝利したが、病に倒れ、36年10月死去した (VEJ 15: 26-27)。

6. 1938年から41年までの反ユダヤ主義政策

【急進右翼諸潮流の台頭と反ユダヤ主義】

1935年の選挙戦ではじめて明確なナチズム候補が政治舞台に登場した。急進的右翼はいくつもの政党に分裂していて、最終的に議会に籍を得たのは二人のナチズム議員だけであった。政権党は議席の70%弱を獲得し、議会支配を継続した。議席を獲得できなかったミニ政党のなかに国民の意志

党があった。サーラシ・フェレンツ¹¹が35年3月1日、選挙数週間前に設立した党であった。この後何年かのうちに、この政党は大きくなり、政治的に成果を獲得していく（VEJ 15: 27）。

急進右翼諸政党の上昇を既成保守諸政党は懸念しながら観察した。1937年、一揆が起きるとの噂が次第に強くなった。これに反応して政府は4月に国民の意志党を禁止した。彼は告訴され、その理由は「反宗教共同体扇動ならびに現存国家社会秩序の暴力的転覆のための扇動」であった。2月に党指導者として書いてばらまいたビラで、彼はユダヤ人を激しい言葉で攻撃し、ハンガリー労働者の権利、労働、価値認知を要求した。ビラによれば、ハンガリー労働者は国民の意志党の元で「ユダヤ指導部の下にある社会民主主義・共産主義の労働組合の暴虐から解放される可能性を手に入れるのだ」。ハンガリー労働者は「祖国の神聖な名前において」権利を請求し、取り戻すのだと。ユダヤ人は労働者を「祖国喪失の卑劣漢の役割」に押し込み、彼らを「プロレタリアートにした」とも。この反コミュニズムの論理によれば、ユダヤ人がネーション没落の原因であった。過激なナショナリズムと反社会民主主義・反コミュニズムが表裏一体となっていた。ビラの第二の部分は「労働者のための故郷」を要求し、そこではほかの諸階級はもはや何の意義も持たなかった。彼は労働者階級の単独支配を要求し、それを「暴力的な道」で獲得するとした（VEJ 15/3¹²）。

刑事裁判所はサーラシを「宗教共同体に対する扇動」ならびに秩序法違

¹¹ ファシズム運動指導者。1930年、参謀本部付少佐。独自の政治綱領作成。その綱領は反ユダヤ主義、ファシズム、および民族主義の折衷的混合物。35年退役し、国民の意志党を結成。36年、幾つかのナチスの党派を統合して矢十字党を創立。国会で多数の議席獲得。37年投獄（38年まで）。44年10月15日、ヒトラーはサーラシを政権の座に就け、サーラシは総統になった。サーラシ体制は、ユダヤ人の大量殺害を進め、国内に未曾有のテロルの嵐をもたらした。45年早くドイツへ逃亡。アメリカ軍が逮捕。ハンガリー法廷で死刑宣告。46年処刑（ジュルコー 1985, 104）。

¹² Der Ungarische Staatliche Korrespondent: Meldung vom 19. Januar 1938 über den Verlauf des Prozesses gegen Ferenc Szálasi.

反の扇動で有罪とし、3か月の禁固刑を科した。しかし弁護側が控訴し、上級審では禁固2か月に減刑され、さらにその執行は3年間猶予された。サーラシの36か月の前線勤務と高級勲章も考慮され、「愛国的確信からのビラ」だと評価されたからであった（VEJ 15/3）。

修正主義・大ハンガリーの再建など極右勢力の「愛国的心情」との共通項を持つホルティ政府は、急進的右翼を「コントロールするため」、民衆の支持をはぎ取るためと称して、彼らの要求を受け入れた。だがその目的は失敗した。サーラシ投獄は急進右翼を弱体化するのではなく強固にした。国民の意志党の禁止は、その回避策としての矢十字党の結成となった。この党は1938年2月に禁止されるまでにさらに大きな大衆運動に成長した。1か月後に設立された後継政党は戦間期最後の39年選挙で15%を獲得し、「記録的」成功を収め、議会の最大野党になった。矢十字党が直接の候補者を出せた選挙区では、平均得票率40%にのぼった。ナチス志向の諸政党を合わせると議席総数260のうち48議席を獲得した。この成果は、国内政治的側面だけではなく、ドイツにおけるナチズムの上昇・領土膨張が影響した。第一次世界大戦で失った領土の再獲得が両者の共通項だったからである（VEJ 15: 28）。

【領土の回復＝拡大とユダヤ人】

ナチス・ドイツはオーストリア併合後、1938年10月チェコスロヴァキア共和国のズデーテン地域を併合して共和国を分割し、さらに39年3月にブラハに進駐してベーメン・メーレン保護領を創設し、スロヴァキアを分離した。この一連の展開のなかで、ハンガリーも獲物の分け前を得た。

このズデーテン危機に際してホルティはヒトラーに書簡（1938年9月17日付）を送り、「チェコスロヴァキアのすべての民族が人民投票によって各民族がすむ地域の所属を決定する権利を認定されること」を求めた。その12日後署名のミュンヘン協定の付帯事項に、チェコスロヴァキアがハンガリーとハンガリー少数民族問題の解決について交渉することが追加され

た。しかし、両国の交渉は挫折し、ドイツとイタリアが仲裁裁定を行った。この枢軸諸国による第一次ウィーン裁定（38年11月2日）は、スロヴァキアとカルパト - ウクライナの一部（11927平方キロ）を100万の住民ともども「母国へ」返還することをチェコスロヴァキアに強制した。ハンガリー外交政策の目標は残りのカルパト - ウクライナ——ミュンヘン協定によりチェコスロヴァキア内で自治を獲得——も取り戻すことにあった。ヒトラーが39年3月支持を約束したことを踏まえ、ハンガリーの軍隊が全カルパト - ウクライナを占領した（VEJ 15: 28）。

すでに数か月後、さらに広範な国境修正の希望を実現する新しい機会がやって来た。ソ連は1939年8月、独ソ不可侵条約の秘密協定でベッサラビアへの関心を表明していたが、40年6月この地域ならびにブコヴィナの一部に進駐した。それとともにハンガリーはジーベンビュルゲンの一部を再び手に入れるチャンスが到来したと見た。ルーマニアとハンガリーの間の領土問題をめぐる紛争は先鋭化し、交渉の道は一週間後には挫折した。ドイツとイタリアが再び介入した1940年8月30日の第二次ウィーン裁定では、北ジーベンビュルゲン、トランシルヴァニアの領土約43000平方キロを100万のルーマニア人を含む250万の住民と一緒にハンガリーに返還させることに成功した。さらに、41年4月のユーゴスラヴィアへのドイツの侵略とリンクしてバチュカとバラニャ南部を占領し、遂に93000平方キロ（1938）から172000平方キロへと領土を倍増近くまで拡大することに成功した（VEJ 15: 29, ジュルコー1985, 61-62）。

だがこうした領土膨張は同時にドイツへの経済的・政治的従属を強めた。

1939年5月5日にユダヤ人差別の第二ユダヤ法案¹³を通過させた首相テレキ・パール伯は、国際連盟から脱退し、反コミンテルン協定にも加わった。第二次ウィーン裁定後、ドイツ語マイノリティに広範な特権を保証し、ドイツと農業協定を締結した。ドイツはハンガリーの最も重要な通商パートナーになった。ドイツの利害に応じて政府は小麦、豆類、植物油の生産を増やした。さらにユーゴスラヴィア地域占領後は、パチュカから余剰食料をドイツとイタリアへ、領域内の全石油採掘量をドイツへ引き渡す義務を負った。しかしながら、ハンガリー政府は、スロヴァキア政府と違って、ポーランドに対する戦争に参加することを拒否し、9月ドイツ国防軍に自国通過許可を与えなかった（VEJ 15: 29）。

カルパト - ウクライナ、北ジーベンピュルゲン（ルーマニア・トランシルバニア）、フェルヴィデーク（上部ハンガリー）のユダヤ人に対し、これら地域のハンガリーへの再編入の影響は非常に異なっていた。フェルヴィデークで生活するユダヤ人の多くはチェコスロヴァキアの支配をポジティブに受け止めていた。若干のものはハンガリーによる併合を——1920年代以降次第に権利が剥奪されていたので——複雑な感情で受け止めた。だが、チェコスロヴァキア支配の時代にハンガリーのために活動したものは、失望した。同様に北ジーベンピュルゲンのユダヤ人共同体も、当初多くがハンガリー軍隊を大歓迎したのであるが、失望した。彼らは政府が反ユダヤ法を併合地域に特に厳しく適用することをすぐに確認せざるを得な

¹³ 「公的生活と経済におけるユダヤ人の勢力拡大を制限する」法律。この法律により、信仰上はユダヤ教徒でなくても、片親がユダヤ人か、あるいは祖父母のうち二人がユダヤ人の場合には、反ユダヤ人措置が適用されることになった。この法律によって6万人のユダヤ人が職を失った（ジュルコー 1985, 80）。ナチス・ドイツとの一体化の象徴であるユダヤ人差別の第一ユダヤ法（後述）は1938年初め、ダラーニ内閣が制定した。これはハンガリー社会の中の右翼支持層、とりわけ参謀将校・中間階級を満足させるべき重要な法律であった。中間階級はユダヤ系知識人・公務員が免職されて空いた席に着く法的権利を得た（パムレーニ1980, 226-228）。

かったからである (VEJ 15: 29-30)。

領土拡大によってハンガリーのユダヤ人の数は1941年国勢調査によれば725005人になっていた。トリアノン条約の国境内には約40万人のユダヤ人がいた。そのうち、184453人はブダペストに。さらに10万人のキリスト教への改宗者がいた。反ユダヤ法により、この改宗者もユダヤ人と見なされた。併合地域のユダヤ人の社会構造はトリアノン・ハンガリーのそれとは相当に違っていた。ハンガリーに併合された地域には数多くの貧しい正統派ユダヤ人——宗教的伝統としきたりを堅持——が生活していた。ここでは同化への希望はトリアノン・ハンガリーよりもわずかであった。したがって、41年国勢調査で諸併合地においてはトリアノン・ハンガリーよりもはるかに多くのユダヤ人が「ユダヤ民族」として信仰告白していた。この社会的宗教的相違の上に「二階級反ユダヤ主義 (Zwei-Klassen-Anisemitismus)」が構築された。ハンガリーの政治家はホルティ自身を含めて、トリアノン・ハンガリーの同化したブルジョア的ユダヤ人——社会の近代化と国の文化的経済的繁栄に貢献するものとして——と併合諸地域の非同化で、ほとんどが正統派のイディッシュ語ユダヤ人——貧しく慎ましやかな生活環境で生活——とを公的な場で区別した。併合諸地域における反ユダヤ主義的諸措置の急進的転換は、そうでなくとも多くの当地で生活するユダヤ人の厳しい経済状況を過酷なものとした。「営業証明書その他のライセンスの剥奪が少なくとも80%のものに以前の仕事と生計の道を不可能にした」(VEJ 15: 30)。カルパト - ウクライナのユダヤ人保護局長の報告は「生活水準の劇的低下」の実態を詳細に述べている (VEJ 15/49)。

【反ユダヤ法】

1936年10月のゲンベシュ死去後首相になったダラーニは、38年3月5日、「ユダヤ人問題」は法的な道で解決されなければならないと表明した。核心的問題は、国内に生活するユダヤ人がその特別の素質と状態に基づいて、しかし部分的には「ハンガリー人種の無関心」のゆえに、経済生活の特定

分野で「不釣り合いに大きな役割」を演じていることにあるとした。1か月後、4月8日にダラーニは「社会的経済的生活の均衡の実質的確保のため」の法案を提出した。これがのちに第一ユダヤ人法と称された。5月末に発効したこの法律は特定の職業分野でユダヤ人のパーセントを制限した。特に新聞雑誌、演劇映画、弁護士、技師、医者などをそれぞれの職業会議所に会員登録させ、それらの分野でユダヤ人割合が20%を超えてはならないと定めた。「ユダヤ人」の定義は所属宗教と結びつけられたが、1919年以降に改宗した個人は引き続きユダヤ人と見なした (VEJ 15/14)。

この法律でハンガリー政府はハンガリー経済からのユダヤ人排除の急進的措置を制定したわけだが、上記職業分野でキリスト教徒が十分に活躍できるとは考えず、排除に時間がかかることを認識していた。事実、大戦前期のハンガリー経済でユダヤ人の企業家と自営業者が重要な役割を演じていた。医者、弁護士、ジャーナリスト、工場経営者でユダヤ人の割合は30ないし50%だった。若干のユダヤ人家族は国家的重要経営を所有し、何千人もの従業員を抱える鉄鋼金属工場もあった。ただし、ハンガリーのユダヤ人の過半数は特別裕福なわけではなかった。右翼急進主義勢力の増大に対して、政府は膨れ上がる反ユダヤ主義への対抗措置として「第一ユダヤ人法」を正当化した。もちろん、リベラルな立場からは逆に反ユダヤ主義的措置を強化するものとして、社会民主党からは20%の制限がいずれ「高すぎる」と攻撃されることになるとして批判された。作家、芸術家、学者59名が法案反対の声をあげたが (VEJ 15/11)、聞き入れられることはなかった (VEJ 15: 31-32)。

社会民主党が危惧したとおり、制限をもっと強化すべきだという声・勢力が強くなり、遂に1938年12月23日、ベーラ・イムレーディ政府は新しい、先鋭化した法案を提出した。それはテレキ首相のもとで39年5月5日に発効した。この第二ユダヤ法は、「公的経済的生活におけるユダヤ人の拡張

の制限のため」の法律であった（VEJ 15/29¹⁴）。

特定職業でのユダヤ人割合をこれまでの20%から6ないし12%へと制限を厳しくし、国家の官僚・職員から漸次的に解雇することを命じた。ユダヤ人は新聞、出版、劇場、映画館の指導部から追放された。ユダヤ人の官僚・職員からの排除の進展は「知識人の失業の除去のための政府委員会」によって監視した（VEJ 15/91¹⁵）。

ハンガリーはこうした反ユダヤ立法をナチス・ドイツにおける展開そしてほかのヨーロッパ諸国の反ユダヤ主義的傾向をにらみながら進めた。ルーマニアの場合、すでに1938年1月新国籍法を制定し、3分の1以上のユダヤ人がルーマニア国籍を剥奪され、職医者・弁護士等の職業会議所から排除された。1938年7月14日のイタリア民族文化省人種宣言はユダヤ人が「イタリア人種には属さない」とした。数か月後、外国ユダヤ人を追放処分とし、公立学校や大学からユダヤ人の生徒・教師を追放した。ハンガリーが第二ユダヤ人法を公布した後、遂にスロヴァキア政府も最初の反ユダヤ法を議決した（VEJ 15: 32-33）。

もちろん、第二ユダヤ人法はドイツの圧力があって成立したのではなかった。政府の意図は、「今まで以上に広範な政府支持大衆を作り出すため」であった。イムレーディは、1938年11月15日の党集会で領土回復がユダヤ人の高い割合をもたらし、東方からの移民の門を開いたこと、これが第二ユダヤ人法制定を求めたと強調した。この法律により男女約9万人が仕事を失った。またユダヤ人定義（改宗の時期により違いが生じた）によって、家族の中で一方で突然ユダヤ人と見なされるものが出、他方で今まで通り非ユダヤ人と見なされるものがいた。家族が分断された（VEJ 15: 33-34）。

¹⁴ 冒頭のユダヤ人の定義から始まって改宗者の扱い、非嫡出子の扱い、その実に詳細な規定が14ページ（史料集で180 - 193ページ）に渡って規定されている。

¹⁵ 1943年1月、この監視委員会の官僚と職員は、600名になっていた（VEJ 15: 339）。

【労働奉仕】

1939年5月11日制定のハンガリー国防法は軍事的労働奉仕を導入した。それは、「信用できない、したがって国防には不適当な人間」に適用された。該当事者第一はユダヤ人と коммуニストとされ、数か月の軍事的代替奉仕に召集されることとなった。この後、労働奉仕令は何度も修正され、厳しくされたり緩和されたりした。1940年までに防衛省は60のユダヤ人労働隊を編成した。それらは特に道路建設、空港、農業、それに要塞建設にも使役された（VEJ 15: 35-36）。

労働奉仕隊の処遇は最初のうちある程度人間的であった。しかし、1941年春以降、ハンガリーがヨーロッパの軍事対決の渦中に入り込む中で、状況は変化した。ハンガリーは1939年、ポーランド攻撃への参加を拒否した。しかし、41年4月、国防軍のユーゴスラヴィアへの攻撃をユーゴスラヴィア、ヴォイヴォディナの一部を占領するために利用した。しかし、数多くの労働奉仕隊員の生命に深刻な転機をもたらしたのは、ハンガリーのソ連に対する宣戦布告（41年6月27日）であった。ナチス・ドイツのソ連侵攻にルーマニア、スロヴァキアとともに加わった。ハンガリー政治指導部は、これに加わらなかった場合、領土に関する仲裁裁定が不利に修正されることを恐れた（VEJ 15: 36）。

この2か月ほど前、政府は労働奉仕を相当に厳しくし、ハンガリー軍のなかでのユダヤ人の差別待遇を合法化する政令を出した。これによりユダヤ系の約16000人が軍の階級を失った。例外規定は第一次世界大戦中の特別の功績についてのみとされた。ユダヤ教共同体メンバーとキリスト教に改宗したメンバーは武装軍事奉仕をもはや行うことはできず、黄色ないし白色の腕章をつけなければならなくなった（VEJ 15: 36-37）。

1942年3月17日、軍指導部はついにユダヤ人労働奉仕隊を前線に配置することを決めた。大部分はウクライナに派遣され、第二ハンガリー軍の下に置かれた。37000人から50000人が東部戦線——多くは前線の後方地域——に投入されたと見積もられている。労働奉仕隊の一部は特に危険な作業、

地雷探索のような作業を強制され、ほかのものは補給、堡壘構築などに駆り出された（VEJ 15: 37）。多数の労働奉仕者が道路建設の重労働や食品運搬に投じられたが給養は不十分で仮宿泊施設で冬の寒さに苦しんだ。この窮状を緩和するために手を差し伸べたのはハンガリー・ユダヤ人救援組織で、ユダヤ教共同体メンバーに繰り返し寄付を呼び掛けた（VEJ 15/62）。

しかし、劣悪な労働・生活諸条件ならびにハンガリー軍将校兵士の「野蛮なあしらい」の結果、労働奉仕のユダヤ人が数多く死去した。1943年1月のソ連の冬季攻勢で第二ハンガリー軍は壊滅させられた。21000人以上の労働奉仕者が死亡、負傷、またはソ連の戦時捕虜となった。43年にはドイツもハンガリーの労働奉仕を求め、セルビアでの鉱山労働に1万人を要求した。同年7月、ハンガリー政府とトット機関がユダヤ人労働隊提供で協定し、それらは銅鉱山や鉄道路線の建設に投じられた（VEJ 15/101）。

7. 独ソ戦への参戦とユダヤ人殺戮

独ソ戦はソ連赤軍への大攻撃であると同時に、ユダヤ人大量殺戮の開始を意味した。ハンガリーは1941年6月23日、ナチス・ドイツ奇襲攻撃開始の翌日、ソ連と外交関係を断ち、27日にソ連に宣戦布告をした。

【カメネツ - ポドルスキ大虐殺とその他の追放計画】

ハンガリーのドイツ側参戦は、ハンガリー政府に国内に逃げ込んでいた外国ないし無国籍のユダヤ人を追放する可能性を与えた。1941年7月10日、カルパト - ウクライナの政府委員は首相に、ハンガリー国籍をもたないガリツィア人やジプシーを国境外に追放すると伝えた。この時点までにくつもの大量射殺やボグロムが東ガリツィアの地元ユダヤ人に対して行われていたが、ハンガリー政府はそれを無視していたようである。むしろ、5日後には政府のしかるべき承認を得てハンガリー国籍を持たないユダヤ人を駆り集め、追放を開始した。追放されたユダヤ人の過半数は1939年に

ハンガリーの手に落ちたカルパト - ウクライナ地域の出身であった。彼らの多くはすでに何世代もこの地域に住み着いていたが、そのことを適切な時期に証明できなかったものだった。「チェコ人占領期にハンガリーのために貢献し優遇されていた」ユダヤ人さえ、「不法に」追放されることもあったようである（VEJ 15/54）。さらに、ポーランド、ソ連、無国籍のユダヤ人ならびに中欧からのユダヤ人難民の他に、ハンガリー国籍であっても地元当局の目の上のたんこぶになっていたようなユダヤ人が追放された。追放先はドイツ占領下東ガリツィアであった（VEJ 15：39-40）。

ドイツとハンガリーの軍隊による「ガリツィアとウクライナの征服と占領」によりこの地域への追放に予定されたユダヤ人（ハンガリーにいたロシア国籍とポーランド国籍）はまず閉鎖された収容所に収容された。それはカルパト - ウクライナとガリツィアの間の国境にあった。狭い部屋に多すぎる人数が押し込められた。多くが適当な座席がなく、土の上か手荷物の上に座らざるを得なかった。携帯を許されたのは三日分の食料と50キロの手荷物だけだった。相当数はこれら携帯許可の荷物をまとめる時間もなく、連行された。収容所にはなんの支給もなく、水も食料もなかった。現地のユダヤ人組織が面倒を見なければならなかった（VEJ 15/52）。

1940年7月15日から8月12日までに19426人が追放された。この日、ドイツ軍事当局の促しに基づきハンガリーからの追放作戦は停止となった。政府に対して「過度の侮辱、脅威、気配りのない下級執行員の野蛮」にさらされたこのような追放を停止するよう求める内政外交の圧力が1941年7月末以降、次第に大きくなったからである。野党政治家が異議を唱え、著名な市民が8月20日に内務大臣批判の抗議文書を出すまでになった（VEJ 15/53）。批判はドイツからも来た。ハンガリー国境警察の41年10月ごろの報告によれば、ドイツ当局は占領地域に送り込まれてくる何千人もの「無国籍ないし外国の」ユダヤ人を治安問題と見なしたからである。その結果、追放予定のロシア国籍とポーランド国籍の「非常に大きい部分」がハンガリー国内にとどまることとなった（VEJ 15/60）。ユダヤ人の追放圧力と受

け入れ拒否の圧力がここでもせめぎ合っていた。

東ガリツィアに移送されたユダヤ人に対し、ハンガリーとドイツの当局は宿泊、食料や医薬品の世話も準備しなかった。ユダヤ人たちは数多くの場合、地元民からの社会的拒絶にもぶつかった。1941年8月30日のある報告によれば、「あらゆる人間的想像を絶した」無慈悲さが見られた。例えば、二つの集落のユダヤ人は路上に追い出され、こん棒でたたかれ続け、15人が死亡し、その他は負傷する有様であった。ユダヤ人医師が治療にあたり、必要な薬を処方したが、薬局はユダヤ人には何も引き渡さなかった。ユダヤ人はそもそも何も買えなかった。パンは彼らには単に一つの観念でしかなかった。なぜなら、彼らには何もなかった。ウクライナ人は彼らに何も売らなかった。餓死寸前。それでも、日ごと、ウクライナ人がユダヤ人から奪えるものを奪い、打擲した。あちらから追い立てられ、こちらからも排除され、スタニスラーウのゲッターに詰め込まれた約1000人は1941年10月12日、いわゆる「スタニスラーウの血の日曜日」に射殺された(VEJ 15/56)。約2000人から3000人がハンガリー領内にかろうじて帰還できた(VEJ 15: 41)。

追放された2万人近いユダヤ人のほとんどの難民はカメネツ＝ポドルスキにやってきた。1941年8月19日のハンガリー軍部隊の報告は、この町の先鋭化した状況を素描している。町のユダヤ人地区は隔離されたユダヤ人でいっぱいであった。その中には多数のブダペスト出身者がいた。彼らは筆舌に尽くしがたい汚泥の中で生活していた。彼らは不完全な衣服でさまよっていた。道路は悪臭を放っていた。少なからぬ家々で埋葬されない死体が臭っていた。ドニエストルの水が汚染され、岸辺にはいたるところ死体が横たわっていた。カメネツ＝ポドルスキのドイツ野戦司令官は困難な補給状況に鑑みてユダヤ人難民の「疎開」を9月1日の民政統治樹立前に要求した。遂に、8月26日、大虐殺が始まった。それは三日間続いた。ロシア南部高級親衛隊・警察指導者と警察大隊320の中隊はハンガリー・ユダヤ人と地元のユダヤ人を射殺した。労働奉仕隊の運転手がこの大虐殺の

証人だった。彼によれば、何百人もが裸にされた。突然、正方形の壕の周りに人が立っていた。何百人の無辜の人々が機関銃で大量に射殺された。これまでの最大の大量虐殺は、総数23600人の男女子供を犠牲にした。そのうち15000人はハンガリーから追放された人々だった（VEJ 15：41-42）。

カメネツ＝ポドルスキ大虐殺の2か月後、外国の新聞がこの殺害作戦について報じた。41年10月26日、『ニューヨーク・タイムズ』によれば、ハンガリーからガリツィアに追放された何千ものユダヤ人、並びに何千ものガリツィア・ユダヤ人がドイツ兵士とウクライナの悪党によって機関銃で射殺された¹⁶。死体があまりにも多いので隠したり埋葬したりせずにドニエストル川に投げ込んだとも（VEJ 15：42）。

1941年8月中ごろ、ハンガリー政府は追放を公式には停止した。だが、ハンガリー当局は42年までユダヤ人の比較的小さなグループをガリツィアへ追い出した。その上42年にはハンガリー軍の高級の地位のものが——上位の政治機関との相談なしに——ドイツ当局と交渉しハンガリーからの約10万人のユダヤ人の追放を受け入れた。ドイツ外務省は当初このイニシアチブを輸送の困難性を理由に拒絶した。しかし同時にドイツ外務省は42年6月、ハンガリーにおけるドイツの反ユダヤ作戦を総括し、ハンガリーで生活する「ユダヤ人の追放を中心的目標に」掲げた。42年7月、ベルリン駐在ハンガリー大使館付武官が改めてユダヤ人10万人の「移住」を持ち出し、ドイツ外務省が追放の可能性を「乗り気で」検討した。だが、ユダヤ人をトランスニストリアに送り込む案はルーマニアの抵抗に遭った。最終的に帝国（ライヒ）保安本部第IV局B4（ユダヤ人・疎開担当）課長アドルフ・アイヒマンは、技術的諸理由により目下は、ハンガリーのための部分作戦（ハンガリーに逃げていたユダヤ人のドニエストルの東への「移住」）を軌道に乗せることは不可能であるとし、42年9月25日の外務省宛書簡で、ハ

¹⁶ ユダヤ人は、ポーランドとウクライナのはざま（野村 2008）だけではなく、ハンガリーとのはざまにもあって、いずれの地域のマジョリティからも状況により迫害を受けたわけである。

ンガリーがすべての自国のユダヤ人を「この措置に加える」まで待つしかないと伝えた (VEJ 15/76)。

【バチュカの大虐殺】

バチュカはハンガリー南部、セルビアと接する地域であったが、1942年1月、ここでハンガリー軍部隊が行った大虐殺は41年7月以降増加したパルチザンの出沒、鎮圧作戦と関連していた。参謀本部長Ferenc Szombathelyiはパルチザン殲滅命令を出し、即決軍法会議を設置させた。それがたくさんの死刑判決を下した。この措置は抵抗グループを非常に弱体化させたが、58名からなるパルチザン部隊はハンガリーの地方警察と軍に損害を与えることに成功した。42年1月4日と5日、ハンガリーの軍、地方警察、国境警察からなる部隊は報復措置としてこの地域で手入れを行った。その結果、パルチザンとハンガリー部隊の間で撃ち合いが発生しただけでなく、主としてセルビア人とユダヤ人の民間住民への殺害作戦も起きた。南バチュカの二つのまち (Csurog, Zsablya) だけで男女子供1500人が殺害された (VEJ 15:43)。

1942年1月20日、ハンガリー軍はノヴィ・サドの町ウーイヴィデーク (Újvidék, Novi Sad) を包囲した。翌21日、「手入れ」と称する大虐殺が始まり、23日まで続いた。879人——その中にはパルチザン、セルビア人、ハンガリー人、ドイツ人のそれぞれ民間人並びに約550人のユダヤ人男女子供がいた——が犠牲になった。虐殺は路上で、あるいはドナウの岸辺で行われ、「町は完全に死滅した。道路は真ん中しか歩けなかった」 (VEJ 15/64)。さらに「手入れ」は1月30日に作戦が中止されるまで続けられた。犠牲者総数は、3000人から3500人と見積もられている。その中に700人から1000人のユダヤ人男女子供がいた。また若干名のバチュカ・ドイツ人も (VEJ 15: 43)。

大虐殺のニュースは国内外で衝撃を引き起こした。ハンガリーの野党は即座に抗議し、事件の調査を要求した。独立小農民党代議士は繰り返し議

会で抗議し、1942年2月4日摂政ホルティに調査を求める包括的な覚書を提出した。数日後ホルティは彼を個人的に引見した。内政的圧力への反応として参謀本部長は異常な事件の調査を命じた。6月、軍裁判官の大佐が詳細な報告書を提出した。そこで彼は「手入れ」の過程で大虐殺が発生したことを確認した。参謀本部長は7月10日、そこで検察官の軍関係者に対する調査を命じた。しかし、ホルティはそれをすぐに中止させた。それは特にハンガリー指導部エリートが「軍の名誉」が汚されるのを見たくなかったからであった。「見捨てられた」下っ端の地方警察官の調査のみが開始されただけだった。「新情報」を理由に43年10月に容疑の「高位」将校3名に対する調査が再開された。しかし、実際はこの調査再開に当たっては43年9月のイタリアの休戦宣言が決定的役割を演じた。ハンガリー政府は戦争から抜け出す可能性を見出そうとますます必死になっていた。戦争犯罪に対する司法の有罪判決のジェスチャーによって西側連合国との交渉に前向きなことを外国に合図しようとしたのである。ワシントンでは3人が主要な役割を演じたことは疑いないが、大虐殺に同意し、むしろ明確な命令を出したハンガリー政府によって「スケープゴートにされた」と評された(VEJ 15/110)。軍検察は主要容疑者たち(3人の「高位」将校)に対する告訴状を提出した。43年12月14日、公判が始まった。しかし、主要被告たちは逮捕されず、44年1月ドイツへ逃亡できた。彼らはヒトラーから個人的に政治亡命を認められた。ハンガリー政府は「大声で」これを批判し、逃亡者たちを「脱走兵で裏切り者だ」と宣言した。2か月後、彼らは親衛隊の征服でハンガリーに帰ってきた(VEJ 15: 44)。

8. 世界大戦下の窮状と反ユダヤ主義政策の展開 1942-43

1942年11月、北アフリカへの連合軍の上陸、43年1月のスターリングラードにおけるドイツ第6軍の敗北とドン河畔におけるハンガリー軍の崩壊によって、引き続き戦闘に加わろうというハンガリー政府の意欲は衰退した。

政府は次第にハンガリー軍を東部から国境地域防衛のために撤退させることに尽力した。同時に西側列強との単独講和の可能性を探ろうとし始めた。トルコ、スイス、スウェーデンでハンガリー外交官は連合国とコンタクトをとり、戦線離脱の条件について交渉した。こうした努力の過程では権威主義的保守的体制の反ユダヤ主義政策は控えめになった。こうした転回はドイツ指導部にも隠しおおせなかった。宣伝相ゲッベルスは43年3月21日の日記に、「ハンガリー外務大臣は迂回路でアンカラの英国米国の大使と連絡をつけたという。その際、もはや一兵たりとも東部戦線に派遣することは考えていないと言明していると。…その上、ユダヤ人政策でもその場にとどまろうとし、我々にはナチズムに照応した反ユダヤ主義政策を遂行したいと見せかけ、実際にはユダヤ人を可能な限り大切にしようしている」と書き込んだ (VEJ 15:47)。

1942年、ドイツとハンガリー外交官ストーヤイ・デメの間でハンガリーにいるユダヤ人のドイツへの引き渡しについて8月から何度か折衝が行われた。外務省次官補マルティン・ルターが外務大臣に10月6日に提出した報告書によれば、ヴァンゼー会議出席者の一人としてユダヤ人問題解決の方向性 (ヴァンゼー会議記念館 2015, 138-167) に沿って、軍司令官ないし民政統治当局ライヒ委員によって命じられた措置、すなわち、ドイツ占領地にいるハンガリー・ユダヤ人の「連れ戻し」を求めた。「占領地域におけるドイツ軍部隊の安全の心配」をその理由とした。12月31日までにドイツが求める諸措置が実行されない場合、占領地の全ユダヤ人の「疎開が開始されることになろう」と。ハンガリー公使はイタリア・ユダヤ人についても同様の措置となっているかを確かめたあと、「現下の事情では、何の異論もない」と基本方針を受け入れることを認めた。占領地域からハンガリー・ユダヤ人の大部分の「疎開」で、「他の諸国の後塵を拝することなど意図しないので」同意することになろう、と (VEJ 15/81)。

ハンガリー国内のユダヤ人問題の措置についても、ルターはハンガリー政府自身が進め、「可及的速やかに決着をつけること」を求めた。ハンガリー

の文化生活・経済生活からのユダヤ人排除、黄色い星の導入などの諸措置も「望ましい」とした。さらに、ドイツとハンガリーのユダヤ人問題の「完膚なき始末」という最終目的の了解の上で「東方への強制移住」を望ましいとした（VEJ 15/81）。

ハンガリー外交官ストーヤイはルターにドイツの「提案ないし希望を可能な限り10月18日以前には未定としてほしい」と申し出た。彼はこの期限までにブダペストに赴き、全案件を詳細に首相カーライ・ミクローシュと場合によっては摂政ホルティと話し合うことを企図していた。ストーヤイは特に摂政とこの問題ですでにしばしば話し合っていた。ストーヤイの話から、摂政が1919年のユダヤ系クン・ベーラの革命・レーテ共和国との対決の経験に基づきドイツの要望に「最大の理解」を示していることを確認できた。ストーヤイによれば、ハンガリーはとりわけユダヤ人によって被害を受けていた。ガリツィアに近接しているためハンガリーにユダヤ人が「特に大規模に」住み着き、経済の全分野で影響力のある地位を「非常に強く占めている」のであった。ただ、それだけにこの問題の最終的解決に手を出すこと、これを非常に速いテンポで遂行することは「容易ではない」のであった。問題は、「約80万から90万のユダヤ人を全経済分野から排除すること」であり、「当然にも一定の時間がかかる」からであった（VEJ 15/81）。

ストーヤイとのこれまでの会談で分かっていることは、首相カーライがユダヤ人には「東方への疎開」後さらなる生存が可能にされているのかどうかという問題にとくに関心をもっているということであった。この点に関してかなり多くの噂が徘徊していた。カーライはこの噂を個人的には「もちろん」信じていなかったとルターに述べた。それに対して首相は「いくぶん心配に」なっているという。首相はハンガリー・ユダヤ人が疎開後悲惨なことに、さらにそれ以上に悪いことに引き渡されたという非難を受ける事態は避けたいと欲しているという。この危惧に答えてルターはストーヤイに対し、ヴァンゼー会議で確認された口上を使った。すなわち、疎開

の全ユダヤ人は、同時にもちろん東方のハンガリー・ユダヤ人は「まず道路建設で使用される」ことになっている。その後はユダヤ人保留地に入れられることになっている。この回答でストーヤイは「明らかに」安心し、この知らせが首相を「特に安心させ、力づけるだろう」という意見だった(VEJ 15/81)。

この機会にルターはストーヤイにカーライが首相就任演説(1942年3月19日)において反ユダヤ政策に関し自らの態度について述べたことを想起させた。その内容はルターの6月3日付外務次官ヴァイツェッカー¹⁷宛書簡の記載によれば、次のようであった。カーライ首相はこの問題での政府の政策を、A. 緊急措置としてユダヤ人の土地森林所有を徴収し、ユダヤ人の田舎への移住を禁止する、B. 誰がユダヤ人であるかは人種主義諸原理によるものとする、C. ハンガリーのユダヤ人問題の解決には強制移住しかない。その実行まではユダヤ人を職業生活からの排除を推進するものとすると表明した。Aについてはすでにしかるべき法律が議会に提出されていた(VEJ 15/70)。

これに加えて、ルターがドイツの立場から実現のためなされるべきこととしたのは、次のことであった。(1) ドイツに住むハンガリー国籍のユダヤ人を進行中のドイツの追放諸措置の中に加えることにハンガリー政府の近々の承諾。(2) ハンガリーにユダヤの星を導入すること。(3) ハンガリーに住むユダヤ人を東方への強制移送のために今後しかるべき期限の合意の上でハンガリー政府の前向き態度を取り付けること(VEJ 15/70)¹⁸。

しかし、ルターとの会談でストーヤイが述べたことはルターに対する「外交的粉飾」というべきものであった。ストーヤイ自身が1942年10月2日、

¹⁷ ヴァイツェッカーを中心とする外務省機構がヒトラー第三帝国の政策をいかに遂行したかの詳しい実証研究がコンツェほか [2018]。

¹⁸ 技術的にはこの問題は、すでにスロヴァキア、クロアチア、ルーマニアの場合と同じようになるだろうと見た(VEJ 13: 31-34; 59-67, VEJ 14: 47-50)。

首相カーライにつきのようなことを述べていたからである。「ヒトラー首相は改めて最も鋭い言葉でユダヤ人に対する態度を示し、その絶滅を約束した。この関連で彼の常に繰り返される断固たる、最後まで突き進む態度表明からは、彼の言辞の背後に空虚な宣伝目的を探してはならないことは、疑いもないだろう」と。いずれにせよこのことを事実が証明すると（VEJ 15:47）。したがって、カーライの危惧は、むしろスターライが自らの具申で裏打ちしていたことであった。

先にも触れたようにドイツ国防軍のスターリングラードにおける敗北によって、特に1943年1月のソ連のドン冬季攻勢によるハンガリー第二軍の壊滅的敗北から「必然的結果」として、ハンガリーの国家と国民は「敗北主義的な」深刻な影響を受けた。ハンガリーがドイツとの軍事同盟・東部戦線からの離脱を測ろうとする傾向が強まってくる。そこでも罪はユダヤ人に帰せられた。ドイツ外務省特命全権としてハンガリーに赴き、情勢を入念に調査したエドムント・フェーゼンマイヤーが提出した極秘調査報告は、ハンガリーの指導層の「敗北主義的態度」と共通の戦争目的の「広範なサボタージュ」の根本的な原因は、「主としてユダヤ人にある」とした。ハンガリー人口に占めるユダヤ人の割合は10%近くだが、ブダペストでは35%。しかし影響力と重要性からみれば、比重ははるかに高い。ユダヤ人は全経済生活で決定的に影響を与えるだけでなく、それ以外の全分野でも多かれ少なかれ支配的だから、であった（VEJ 15/97）。

フェーゼンマイヤーは第一に、なぜハンガリーがユダヤ人に「ヨーロッパの避難所」を提供しているのかと問う。その答えは、ハンガリー住民の根本的特質が広い範囲において敗北主義によって特徴づけられるからであった。しかも、それは「腰抜けだといわれたいため」であった。爆撃に対する不安は非常に強く、国民的野党的グループに至るまで広く浸透している。それ故、ユダヤ人の割合が高く重要性があることのなかに「いかなる深刻な空襲からも守られるための保証人」を見ているのだと（VEJ 15/97）。

第二に、現下のハンガリー政府、ユダヤ人、そしてブルジョアジーの広

い層は、枢軸国の勝利を信じておらず、またそれを望んではいない。彼らは、ドイツもソヴィエトも互いに力を使い尽くし、事実上イギリス人とアメリカ人が大きな力を傾注する危険なしに勝利者として残ることを希望しているのだ。ハンガリー人は「ユダヤ人を温かくもてなす英米の態度」から容赦と好意的な待遇を期待している。彼らは、ユダヤ人のなかに「ハンガリーの利益」の保護のための保証書を見ている。そして、ユダヤ人によって、彼らがこの戦争をただ仕方なく枢軸国側で遂行していると証明できると考えている。しかし実際には、潜在的なサボタージュによって間接的に枢軸の敵のために貢献をしているのだ、と。以上のような「観察」と「分析」を加えた後、フェーゼンマイヤーは、ユダヤ人の立場が特に現在の首相カーライの統治期に「根本的に強化された」とする。カーライ自身、最近、「彼の前任者のユダヤ人問題における不正を改めるため尽力している。ユダヤ人に対する全措置は、外交政策的に見れば、彼からすればハンガリーに対する犯罪だからだ」とまで述べるに至っている。その発言の証拠はある、と (VEJ 15/97)。

フェーゼンマイヤーの評価では、ハンガリーは「ボルシェヴィズムに対する大闘争」における貢献として提供しうることの小部分しか差し出していなかった。ドイツに対して外観と形式を保つために「無条件に必要不可欠なことしか」やっていなかった。このことは実際全領域に当てはまった。特に、経済分野において、なかでも食料、石油、ボーキサイト、繊維、軍需生産において。前述分野のそれぞれで、潜在的なサボタージュの文句のない証拠を出すことは困難なしに可能であるとした。総力戦敗退過程の厳しい現実こそが、全分野における「窮乏現象」の根底的条件であった。しかし、彼によれば、窮乏、特に食料部門のそれは「純粋に人工的なもの」であった。「ユダヤ人の家庭にもブルジョアの家庭にも」蓄えが前代未聞の程度にまで達していると。一方における窮乏現象、他方における富・必要生活物資等の蓄蔵がまたもや、ユダヤ人の所為とされる。すなわち、それらは人工的にユダヤ人によって誘発されたインフレーションによって、

そしてあらゆる類の途方もない噂の流布によって——これがブダペストの日常を支配している——引き起こされている。しかし、インフレーションは不穏を意味し、まさにそれをユダヤ人は望んでいる。なぜなら、それがビジネスの温床であり、知恵を絞って考え出されたシステムに最も奉仕するからである。そして、^{ライヒ}帝国に直接間接に害を与えることを可能にする、と。賃金給料と物価の不均衡はますます大きくなるのだが、当然の結果現象として道義荒廃と汚職が発生する。こうしたことがまたユダヤ人が望んでいたような状態に全国家的行政的構造を陥れる。ところがすべてのこれらの困った状態が最終的に「巧みにひねり出されたプロパガンダによって、^{ライヒ}帝国の責任に帰される」と (VEJ 15/97)。

つまり、第三帝国が始めた独ソ戦から世界大戦への展開と総力戦泥沼化の負の諸現象の責任をヒトラー・ナチスからユダヤ人に転化する論理が貫徹している。罪責の論理からして、ユダヤ人がすべての罪を担わされる生贄となる。これがホロコーストの論理と力学を集約的に表現している。したがって、42年末までのラインハルト作戦終了段階のユダヤ人殺戮統計 (42年末までにヨーロッパ・ユダヤ人「450万減少」と43年4月ヒトラー提出コーヘーア報告、永岑 2022, 271-272) を踏まえたヒトラー・ナチス指導部のハンガリー政府への圧力も強まることとなる。

フェーゼンマイヤーはハンガリー政府内部の権力関係についても同じ秘密報告書にまとめていた。彼の見るところ、摂政ホルティは「孤立した存在」で、ユダヤ人、ユダヤ人と姻戚関係にある貴族、それに聖職者政治家に囲まれている。ハンガリーのボルシェヴィズムからの解放者としての、並びにハンガリーの第一の兵士としての「名声」は体系的に悪用され、歪曲されている。彼が望んでも、彼の年齢と流儀に鑑みればこの側近からもはや抜け出すことはできないだろう。彼が^{ライヒ}帝国の側に立っている唯一の点は、ボルシェヴィズムに対する憎悪である。この点でも彼の側近は、この危険を些事に見せかけようと努力している。それにもかかわらず、ハンガリーの広汎な大衆の中での彼の権威は強固に定着している。彼はハンガリー

の伝統の代表者、法律的思考の擁護者、社会の最高指導者、そしてハンガリー人に今日なお理想と目標として念頭に浮かぶ君主的人格の代表と一般に認められている（VEJ 15/97）。

フェーゼンマイヤーによれば、ドイツはハンガリーで次のような敵をもっていた。（1）ユダヤ人、（2）ユダヤ人と強い親戚関係をもった貴族、（3）聖職者層、（4）ドイツ背教者。これらのグループは個々的には互いに見解を異にしているが、ナチズム（国民社会主義）に対する憎悪では完全に一致し、敵国と多様な関係を育み、枢軸戦線から離脱する時期を待っている。これらに対し、彼がドイツおよび枢軸と協調できる人物、ハンガリーの「国民的政府」のために真剣に考慮の対象となると見たのは二人の人物、すなわち元首相イムレーディと元外務大臣バルドシだけであった。そして、結論的に、枢軸の意味でハンガリーに効果的な影響力を行使するためには、次のような観点を考慮すべきだとした。持続的な政府に変えるためには摂政ホルティを使うしかなく、摂政抜き、あるいは摂政に反対しての政府の挿げ替えは展望がなく、極度に大きな震動の危険を回避することはできない。その前提は摂政の側近トップの排除であり、枢軸の意味で永続的で快適な影響を摂政に与える人物を入れることである。イムレーディ、バルドシあるいは両者を指導的地位に着けようとする場合には、二人は摂政にとっては鬪牛の「赤い布」を意味するので、しかるべき事前準備をするか^{ライヒ}帝国が相当な圧力をかける必要がある、と（VEJ 15/97）。

1943年4月16日・17日の二日間、ホルティは、ザルツブルク近郊クレスハイム城でヒトラーと会談した。その記録（4月18日、主翻訳官パウル・シュミットの記録）によれば、ヒトラーは次のように述べた。「もしユダヤ人がポーランドで仕事をしようと欲しないのなら、彼らは射殺されることになる。彼らが労働できないなら、彼らは滅びなければならない。彼らは結核菌のように処理されることになろう」と。そして、ヒトラーと外務大臣ヨアヒム・フォン・リッベントロップはホルティに「もっと厳しさを」求めた。ホルティは、「それではユダヤ人をどうせよというのか。すでにユダヤ人

からすべての生活の可能性を奪ったあとで。彼らを殴り殺すわけにはいかない」と反対に質問した。これに外務大臣は、「ユダヤ人は全滅させられるか強制収容所に入れられなければならない。ほかの可能性はない」と応じた（VEJ 11/10）。

同じ4月18日、ゲッベルスは日記に次のように記した。ホルティ訪問の初日は、「非常に過激な雰囲気で行われた。ヒトラーはホルティに対し歯に衣着せない言葉を浴びせ、ホルティの政治が全体として見ても特殊に全般的戦争指導とユダヤ人問題でも「誤っている」とした。その際、ヒトラーは、「スペインとポルトガルを仲介にして敵とコンタクトを取ろうとしている」とホルティを叱責した。ホルティはこれを遮ったが、それはあまり効果がなかったと（VEJ 11/11）。実際に、ドイツ側はアンカラのイギリス大使館の電報を手に入れていた。イギリス大使はホルティ側からの接近の試みを「外交的なマヌーヴァー」くらいにしかとらえておらず、まじめには受け取らなかったことをつかんでいた（VEJ 11/10）。

二日目は規則通りに進んだようである。しかし、初日会談前日の4月15日にイギリスの空襲がザルツブルク周辺にあり、会談場所にも「はっきりイギリス航空機の音が聞こえた」。ヒトラーは会談冒頭、「これまでイギリス航空機を撃ち落としたり」と戦果を誇って見せても（VEJ 11/10）、ホルティは安心したであろうか。夜間空襲の体験実態からしても、ホルティが戦争の先行きに不安を感じていたこと、したがって連合国と連絡をつけようとしていたことも当然だと思われる。ヒトラーと外務大臣との高圧的感情的な態度は、冷静さを失ったヒトラー・ドイツの弱さの現れであったからである。

9. ドイツ占領下に陥ったユダヤ人

西側連合国との単独休戦協定に突き進もうとするハンガリーの声はイタリアの枢軸国から連合国への転換が公表された1943年9月8日以降、大き

くなった。イタリアの休戦協定声明の早くも一日後、ハンガリーは連合国と一つの協定を取り決めた。それはとりわけ「ドイツとの軍事的協働」を減らすこと、そしてハンガリー軍部隊をソ連から撤収することを予定していた。ハンガリーと連合国の間の交渉に関する情報が入り、ホルティがハンガリー軍部隊を東部戦線から引き上げたいと要請したことを受け、ヒトラーは遂にハンガリーを占領する決断を下した。東部戦線における赤軍の進撃は急速にハンガリーが第三帝国と組むことで併合することに成功した地域に迫っていた。西側連合国も西部戦線で勝利を重ねた。10月13日にはイタリアもドイツとの同盟を破棄し連合国として参戦した。ドイツ指導部はハンガリーの戦線離脱がバルカンにおける支配を危険にさらし、東部戦線を弱体化することを恐れた。さらにナチス・ドイツはハンガリーのポーキサイトと埋蔵石油——これらの重要性を戦争に決定的なものとして位置付けていた——を決して失いたくなかった。ゲッベルスは44年3月4日の日記に、「ハンガリー軍から大量の武器を手に入れることができる。これはもちろん来るべき激戦で我々にとって役に立つ。その上、ハンガリーは大量の石油備蓄を蓄えている。これも例外なくわが手中に入る。さらに油井もある。しかも相当な規模だ。食料予備も、我々にそれほど大きく貢献するわけではないが、幾分かの意味がある」と (VEJ 15:49)。

「ハンガリー・ユダヤ人問題の解決」の原因として確実にいえることは、先に見たフェーゼンマイヤーの言説にも現れているように、ドイツ指導部が撤退に次ぐ撤退でハンガリーまで押し戻されたドイツ国防軍の背後にいる百万人近いとされるユダヤ人を「脅威」と感じたことである。ドイツ指導部はハンガリーの戦線離脱を「広範に準備した」としてユダヤ人に罪を擦り付けた。ユダヤ人は「ハンガリーの精神的文化的生活を完全に退廃させ、社会的改革運動を意識的に抑圧し、防衛精神をほとんど壊滅させた」と。1944年3月18日、ヒトラーはクレスハイム城での公式訪問の際、摂政ホルティに進駐を告げた。一日後、ドイツ軍部隊がハンガリーを占領した (VEJ 15: 50)。

1944年3月19日の進駐に際してドイツ指導部は先はかなり詳しく紹介した秘密報告書、外務省特命全権代表フェーゼンマイヤーが一年前にハンガリーに赴き「状況を非常に注意深く研究して」提出した報告でのホルティ活用進言、そして43年12月の第二報告での提言「摂政を間接的に総統の兵士とする」方針を採用した（VEJ 15: 50, VEJ 15/97）。

事実、クレスハイム城での会談の際、ヒトラーはホルティにドイツ軍進駐の承諾を強要するだけでなく、ドイツが占領した場合に彼を退陣させないことを彼に確信させた。このやり方で新しく任命する政府が正当化され、民衆のなかの支えが確保されるとみた。ことは計画通りに進んだ。ハンガリー軍は占領軍部隊に何の抵抗もしなかった。ただ一人の国会議員バイチュ-ジリンスキー——小地主党の著名な反独代議士¹⁹——だけがドイツ占領当日、ゲシュタポによる逮捕に武器で抵抗した。短い銃撃戦の後、負傷し逮捕された。新しい親独政府首相には前駐独ハンガリー公使ストレーヤイが任命された。それによってホルティはドイツに好まれたイムレーディがこのポストを獲得するのを妨げることができた。だが、これまでの与党ハンガリー生活党はイムレーディのハンガリー改新党との連立に入らなければならなかった。ホルティは職にとどまり、ドイツとの協力を正当化する役割を果たした。彼は諸反ユダヤ法の議決の際、政府に「フリーハンドを与え、何の影響力も行使したくない」とした。反ユダヤ主義諸法律は彼の承諾と署名なしに制定された。44年3月29日、ハンガリー政府は6歳以上の全ユダヤ人に黄色い星をつけることを命じた（VEJ 15: 50-51, VEJ 15/119, 120）。

フェーゼンマイヤーは1944年3月19日、ハンガリーにおける大ドイツ^{ライヒ}帝国特命全権に任命された。彼はハンガリー諸官庁に引き続き一定の行動の自由を与え、占領権力が直接的な行政・警察課題の負担から解放される

¹⁹ パムレーニ [1980] 2, 270. 1944年11月初め、「ハンガリー民族蜂起・解放委員会」議長。武装抵抗開始前に矢十字党によって逮捕され、死刑宣告を受け、処刑された（同, 283）。

よう尽力した。それによりハンガリー内のドイツの兵士と治安要員の数をわずかに保つべきものとされた。すでにドイツ占領初日から数多くの逮捕・収監が行われた。それはハンス・ウルリッヒ・ゲシュケ率いる治安警察保安部の8つの出動部隊（アインザッツコマンド）が実施した。この部隊は少し前の3月10日にマウトハウゼン収容所に集合し、ハンガリーへのドイツ進駐を準備した。この出動部隊のもとにアドルフ・アイヒマン率いる特別出動コマンド（ブンダーアインザッツコマンド）もあった。その任務はハンガリーからの「ユダヤ人輸送の技術的遂行」だとされた。アイヒマンは彼の指示を直接帝国保安本部から得ていたが、彼の特別出動コマンドは形式的にハンガリー高級親衛隊・警察指導者、オットー・ヴィンケルマンの下にあり、彼がフェーゼンマイヤーに定期的に特別出動コマンドの仕事について報告した。ユダヤ人強制移送はフェーゼンマイヤーの管轄ではなかったが、そのための政治的前提諸条件を作り出し、摩擦のない進行を保障した（VEJ 15: 51）。

占領後最初の何週間か、何千ものユダヤ人が逮捕された。逮捕されたのは、主として工業家、権威主義的保守的体制の政治家、諸野党の支持者・党員ならびに知識人——その中に数多くのユダヤ人もいた。逮捕は前もって準備されていたリストおよび住民からの密告に基づいて行われた。逮捕者のほとんどはマウトハウゼン収容所に拘留された。1944年4月25日、53人を乗せた最初の列車がハンガリーから到着した（VEJ 15: 52）。ハンガリー当局は野党の排除に加えてドイツ占領者と協力して反ユダヤ政策も先鋭化させ、ドイツ支配下のヨーロッパですでに部分的には何年にもわたって適用されてきた多くの措置を導入した。これらの措置はほとんどの場合、ハンガリー側で仕上げられ、実施された。フェーゼンマイヤーは4月7日の外務省宛報告で、反ユダヤの立法が「異常なほどの迅速さで」制定され、ハンガリー新政府がユダヤ人問題の解決に着手したと伝えた（VEJ 15/131）。

1944年4月5日、ハンガリーに住む6歳以上の全ユダヤ人は黄色い星着帯を義務付けられた。誰がユダヤ人に該当するかの定義が拡張され、これ

までは反ユダヤ諸規定から除外されていたたくさんのキリスト教への改宗者も経済生活から排除されていった。たとえば、あるキリスト教前線兵士は負傷した病院から内務大臣宛に、三日後に前線に向かうので家族の面倒が見られなくなるとし、改宗した彼の妻が黄色い星を着帯しなくて済むよう請願せざるを得なかった（VEJ 15/123）。ハンガリー政府は同時にユダヤ人のラジオ、電話、自動車、遂には全財産を没収していった。4月16日、ハンガリー政府は全ユダヤ人に財産価値を4月30日までに申告することを義務付けた（VEJ 15/137）。ユダヤ人財産はユダヤ人住民のゲットー化や強制移送の資金に使われるとされただけでなく、国家予算の立て直しにも役立つべきものとされた。ユダヤ人財産の強奪は調整なく無秩序に——ある場合には矢十字党により、また当局により——行われた（VEJ 15/172）。ユダヤ人財産の競売では暴力沙汰も発生した（VEJ 15/222）。ユダヤ人家屋が略奪で家具が使用できなくなることもあった（VEJ 15/252）。数千人が経済生活から排除され、所有が奪われた結果、幾つかの経済部門では生産や供給に隘路が生じた（VEJ 15: 53）。

ハンガリー政府は1944年3月末、ユダヤ人の芸術家、官吏、法律家とジャーナリストの職業を禁止した。ユダヤ人の医者だけは仕事を続けられた。彼らがハンガリーの全医者半数以上を占めていたからであった。ユダヤ人は家事で非ユダヤ人をもはや雇ってはならず、4月7日、文書による許可なく滞在場所を去ることを禁じた。数多くの県・郡の責任者、市町村長、警察司令官が政府の命令よりも早く黄色の星着帯を強制し、自分の権限内で独自の措置（例えば所有剥奪）を執ることもあった（VEJ 15/121）。

ハンガリー・ユダヤ人の集中と追放を管轄するアイヒマンの特別出動コマンド部隊は、ドイツ進駐の日にユダヤ人共同体と接触し、責任者に翌日10時に出頭を命じた。絶望したユダヤ人共同体指導部は、ハンガリー当局と接触し、助けを求めようとしたが、それは挫折した。彼らは警察副所長に会えただけだったが、ドイツ人の命令に従えと言われてしまった。1944年3月20日、アイヒマン代理、ヘルマン・クルマイとディーター・ヴィス

リツェニーが共同体理事に計画の反ユダヤ諸措置について情報を与え、同時に文化的精神的生活を妨げられることなく——ドイツ当局と協力すれば——継続できる見通しだと伝えた。翌日、ドイツの命令でブダペストにユダヤ人中央評議会が設立された。そこには、改革派や正統派の共同体の他にシオニストも代表を出すことになった。10日後、44年3月31日、アイヒマンはユダヤ人評議会の代表者たちを迎え、彼らの要請に理解を示し、慰撫に努め、彼らの任務を伝えた。当時のユダヤ人共同体の代表の一人によれば、アイヒマンは黄色い星着帯義務を負うものはすべてその宗教にかかわらず——ユダヤ人であればその現在の宗教所属が何であれ——ユダヤ人中央評議会の責任となると伝えた。また、首都ブダペスト以外のユダヤ人共同体も、中央評議会の下に置くとした。そして、彼が特に関心のあるのがユダヤ人労働力である、と。強制労働者はハンガリー内にとどまることが許されるのかどうかの質問に対して、アイヒマンは「最終的回答を与えることはできない」と答えた（VEJ 15: 53-54）。

数多くの反ユダヤの諸規則に、長い間権威主義的保守的体制を信頼してきたハンガリー・ユダヤ人の動揺は深刻で、動揺ただならなかった。自殺者の数は3月中に急上昇し、44年4月からのゲッター設置とともにその暫定的頂点に達した。他方で、非ユダヤ人住民の大部分は、反ユダヤ措置の厳格化を歓迎した。ある作家は次のように書いた。「ハンガリー中間層は気が狂い、ユダヤ人問題で泥酔に陥った」と。これが、ソ連赤軍がハンガリー国境Yasinya（現在はウクライナのザカルパート）に迫り、英米空軍機がペスト上空を旋回するような戦況下の実態であった（VEJ 15: 54）。

10. ゲッター化——短期集中的に完了——

1944年4月7日、内務省はハンガリー・ユダヤ人をほかの住民から分離し、彼らの財産を没収したうえで各地域の収容所に入れる極秘命令を出した。この時点で、反ユダヤ諸規則によりユダヤ人とみなされるユダヤ人の

数は約76万2000人の男女子供であった。ハンガリー政府は「最短期間で国をユダヤ人から解放する」こととした。例外は戦時重要経営、露天掘り、比較的大きな企業ならびに大農場で働く専門的訓練を受けたユダヤ人で、即時の解雇が生産を阻害すると思われるものたちだけであった。非戦時重要経営ではユダヤ人労働者は直ちに交代させるものとした。ユダヤ人のゲットーへの集中は各地を管轄する警察に行わせた。ドイツ治安警察は「現地で助言機関となる」ことにした。両者の摩擦のない協力に「特別の注意を払う」こととされた。特別出動コマンドで強制追放の助言者となったのは、これまでのヨーロッパ・ユダヤ人の迫害と殺害に参加して経験豊富な約20人であった。そのなかに、ヘルマン・クルマイ、ディーター・ヴィスリツェニー、テオドル・ダンネッカー、ジークフリート・ザイドル、フランツ・ノヴァクがいた（VEJ 15/129, VEJ 15: 54-55）。

ゲットー化と強制追放には現地警察等諸機関の協力が不可欠だったが、国により政治軍事情勢により、協力度はさまざまであった。デンマークでは警察と沿岸警備隊の「見逃し」が数千人のユダヤ人を救った。ルーマニアでもユダヤ人が体系的迫害の犠牲者となった。だが、イオン・アントネスク支配下のルーマニア指導部は1942年、ルーマニア領土中核地域のユダヤ人の強制追放について、以前の同意を撤回した。フランスでも、外国ユダヤ人の追放ではフランス警察が進んで協力したが、対独協力体制は最初、本国ユダヤ人をドイツに引き渡すことを拒絶した。ハンガリーでは行政府、特に内務省、その二人の次官エンドレ・ラースローとバキ・ラースローと警察機構がドイツ当局の協力を進んで行き、アイヒマン特別出動コマンドは数週間で目的を達成することができた（VEJ 15: 54-55）。

ユダヤ人の強制集中化は1944年4月16日に始まった。そして、6月はじめまでにハンガリー当局はドイツ特別出動コマンドと協力して40万人以上のユダヤ人を215のゲットーと集中収容所にまとめた。結果、ハンガリーのゲットー化はブダペストを除き数週間で完全に完了した。ゲットー化はハンガリーが併合した諸地域において領土中核地域よりも野蛮だっただけ

でなく、明らかに無秩序に進められた。ユダヤ人住民は概して臨時収容所に極度に劣悪な諸条件で集中された。そもそも非常に多くの人間を収容するための上下水道など存在しないレンガ工場敷地などが収容所とされたから当然のことであった。地域の衛生当局は水の供給が不十分で、便所不足によるハエの増殖や悪臭蔓延など衛生状態の劣悪さからチフスの危険性を指摘した (VEJ 15/140, 148)。領土中核地域では併合諸地域での経験を踏まえて比較的大きな諸都市に住んでいるユダヤ人は都市の他の一般地域からは区別された区画に移され、そこにほとんど完全に閉じ込められた。村々や人口一万人以下の小都市のユダヤ人は4月26日の命令で暫定的に地元のシナゴグやその他のユダヤ人共同体の施設に入れられた。ハンガリー当局はその後、彼らも近くにある比較的大きな諸都市のゲットーに移された。領土中核地域からのユダヤ人は強制追放前の1-2週間になって集中収容所に集められた。若干の都市では幾つかのゲットーが設置され、地元のユダヤ人住民が閉鎖区画、しばしばその都市の旧ユダヤ人地区に入れられた。しかし、都市周辺のユダヤ人はほとんどが都市郊外にある集中収容所に引越さなければならなかった (VEJ 15: 56)。

ブダペストでは当局が当初ユダヤ人住民を1944年6月半ば以降、直径30センチの黄色の星でしるしが付けられ全都市領域に散らばった家々にまとめることにした。戦争重要工場の近くには労働奉仕収容所が設置された。当局は閉鎖的なゲットーの創出は1944年11月まで拒否した。なぜなら、彼らは——噂によって、これはブダペスト・ユダヤ人評議会によっても流布されたのだが——もっぱら非ユダヤ人だけが住む都市地区への爆撃を恐れたからであった (VEJ 15: 57)。

ほとんどのゲットーは垣で囲まれ、外から警察によって監視されていた。しかし、すべてが完全に外部と遮断されていたわけではなかった。ユダヤ人評議会のメンバーが当局の用事を片付けたり、地元の市場に出かけたりしなければならぬ諸個人がゲットー敷地を離れることは——当局の許可する特定の時間に——許されていた。数少ないがいくつかのゲットーでは

当地の市町村長が無制限の出入りを許可した。戦時における一般的な労働力不足に鑑みて多くの市町村長・役人がゲッターの完全な閉鎖を問題だと見なしていた。そんなことをすれば、戦争経済から貴重な労働力が失われてしまうからであった。したがって、しばしば若い婦人や男子がゲッター外部の農業経営の労働に割り当てられた。若干のものは軍事目的のためにも、または鉱業所にも配置された。相当数のところではユダヤ人は彼らのもともとの仕事さえも許された。非ユダヤ人の労働力が不足した——特に医療分野で——ためであった。あるユダヤ人医師は、公式には非ユダヤ人の患者を診察してはならなかったが、毎日ゲッターを出て患者を診た（VEJ 15: 57）。

ハンガリー政府とドイツ関係機関（トット機関、労働配置全権、治安警察、国防軍）がどの程度ユダヤ人労働力の搾取に関心を持っていたかは、男子ユダヤ人の労働奉仕への招集が強制追放前に強化されたことに示されている。1944年5月1日のドイツ側との会談を踏まえ、ハンガリー防衛省はユダヤ人労働奉仕隊の数を210から575に引き上げた。「計画中のユダヤ人のハンガリーからの疎開によって焦眉の軍事的労働計画が脅かされないため」であった。この措置によって、「約15万人の労働ユダヤ人が疎開措置から除外されることになろう」と。トット機関によってドイツ本国の労働配置のために必要とされるハンガリー労働力10万人については、ハンガリーからの移送ユダヤ人を管轄する親衛隊管理経済本部に要求しなければならなかった（VEJ 15/162）。労働奉仕隊の男子ユダヤ人は、44年10月の矢十字党の権力掌握まで強制追放から除外された（VEJ 15: 58）。

11. 追放の第一段階（1944年5月～7月）

たくさんのゲッターの臨時的性格は多数の市町村長がゲッターを短期の過渡的の滞在地と見なしていたことから見取れた。なるほど1944年3月のドイツ軍進駐に際してはユダヤ人が移送されるのかどうか、移送される

としてどれほどの規模なのかといったことは確定していなかった。「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の最終解決」にハンガリーのユダヤ人が含まれるべきこと、しかるべき準備を進めていることについては、42年1月のヴァンゼー会議に出席した中央諸官庁次官級クラスの高官たちが確認していたことであった（ヴァンゼー会議編著 2015）。しかし、42年から44年の間に内政的外交的枠組み諸条件は根本的に変化した。文字通りグローバルな世界大戦への突入、総力戦とその泥沼化、ドイツ第三帝国敗退の進行、枢軸国側敗退への大勢的転換といったところである。44年春、ドイツ指導部は軍事情勢を考慮してハンガリーを占領する部隊の数を可能な限り少なくしておこうとした。したがって、ハンガリー官民の一切の抵抗を誘発しないこと、ハンガリー国家機関の協力を危険にさらさないことがドイツ指導部の重大な関心事であった。しかしながら、ハンガリー政府がユダヤ人のゲットー化と強制追放にどの程度協力するのか、ドイツが占領する時点でははっきりしなかった。特に、ハンガリー政府が領土中核地域の同化が進んだユダヤ人の追放、特にブダペストからの追放に同意するかどうかの問題があった（VEJ 15:60）。

その上、ドイツ指導部は広域の連合国空爆への対応として、軍需生産・航空機生産を地下の洞穴や坑道に移すことないしは巨大な防空壕を設置することを決め、1943年12月以降大々的労働需要が発生していた。ハインリヒ・ヒムラーはまだ42年11月、ドイツ本国に設置した全集中収容所から「ユダヤ人を無くせ」との指示を出していたのだが、44年春には、ドイツ本国の労働力不足をハンガリーからのユダヤ人強制労働者で対応する決定を下した。44年4月初め、ヒトラーは、親衛隊全国指導者ヒムラーと個人的に連絡をつけて、ハンガリーから「ドイツ軍需生産移転と大坑道建設」に必要な10万人を、それに見合ったユダヤ人割り当ての確保によって調達すると表明した（VEJ 15/128）。

1944年4月6-7日の会議録によれば、航空省次官ミルヒ元帥が航空機増産計画について表や図面を使って説明し、地下への生産移転計画の大部

分が計画に従って確定され、最初の段階として地上生産の分散を8月頃までに終了し、第二段階として最も壊れやすい工場を年末までに地下に移転終了させ、トータルな安全を確保するとした。ミルヒは軍需生産の「中央計画」(Zentrale Planung)の建設会議の結果について報告したが、それによれば「全情勢の並外れた緊張状態のせい」で最重要建造物のみが実現可能であった。ヒトラーは全エネルギーで彼が求める二つの大工場(それぞれ少なくとも60万㎡)を建設することを要求した。その際、彼は、工場の一つはコンクリート製ではなく、航空機製造ユンカース工場指導下の地下工場(ミッテルbau)とする提案を承認した(VEJ 15/128)。

この会議では、ハンガリーの生産能力予備を活用しつくすことも重要な論点となった。ハンガリーの軍需生産の困難解決と武器生産およびハンガリー軍のドイツ製武器による装備への転換なども必要となった(VEJ 15/128)。44年4月のドイツ軍事生産体制の「異常な緊張状態」こそは、ユダヤ人の運命を左右したといわなければならない。会議を受けて、翌日、航空省は戦闘機増産のために10万人のユダヤ人労働者を要求した。4月13日、フェーゼンマイヤーはヒトラーの要望をハンガリー首相ストーヤイに伝え、ストーヤイは口頭で4月に5万人のユダヤ人強制労働者を、さらに5月に5万人をドイツに引き渡すことを約束した(VEJ 15:60-61)。

しかし、ユダヤ人労働者のドイツ本国への輸送は、そもそも「戦時経済的利益に広範に配慮が必要」な全般的緊張状態では簡単なことではなかった。1944年4月22日の外務大臣リッペントロップ宛書簡によれば、アイヒマンは帝国(ライヒ)保安本部から「5万人のユダヤ人を労働配置のため閉鎖収容所に」移送する指示を受け取ったようである。しかし、翌23日のフェーゼンマイヤーからリッター大使宛て電報によれば、ゲッターに集めたカルパト地域その他からのユダヤ人の5月15日以降毎日3千人のアウシュヴィッツへの輸送が優先されたようで、「現在の輸送諸困難に鑑みて」アウシュヴィッツ移送作戦の遂行を脅かさないために「5万人の労働ユダヤ人のブダペスト周辺地域からの輸送は、少し延期せざるをえない」状態だっ

た (VEJ 15/147)。戦闘機増産の要請と治安秩序安定の要請とのせめぎ合う第三帝国のいわば断末魔ともいべき状況ではなかろうか。つまりは、第三帝国敗退の過酷な諸条件が、ドイツ軍の進駐によってハンガリー・ユダヤ人の大量殺害を必然化した、と。

ゲットーに詰め込まれたユダヤ人はすでに生存条件を剥奪されていた。ゲットーの生活が長期化することはありえなかった。ゲットーからどこかへの「移送」、「疎開」は、必然化していた。1944年4月26日、ハンガリー閣議は「5万人の労働奉仕者」を全家族とともにドイツ本国へ引き渡すことを承認した。それによって4月13日のストーヤイの口頭承認を公的に認証しただけでなく、移送者のグループを強制労働者の家族にまで拡大した。もちろん、この閣議承諾はまだハンガリーの全ユダヤ人を包括したものではなかった。5月4日と5日のウィーンでの列車運行会議も、ハンガリーが併合したカルパト-ウクライナ、南スロヴァキア、そして北ジーベンピュルゲンからの約35万人の移送を組織することを議論したが、ハンガリー領土中核地域のユダヤ人住民については検討していなかった。ウィーンでアイヒマンの鉄道輸送調整担当者フランツ・ノヴァク、警察代表、ドイツ、ハンガリー、スロヴァキアの鉄道の代表者は、追放の技術的処理について相談し、毎日4列車、総数110列車とすることで合意した。路線は、カルパト-ウクライナ、カシャウ（スロヴァキアの町コシツェ）、ムシナ（ポーランド南部・スロヴァキアとの国境近くの鉄道分岐点）、タルヌフ（ポーランド南部の都市）、クラカウ（アウシュヴィッツ）であった。この数字は5月中ごろまでたくさんのドキュメントの中に見出される (VEJ 15/168)。

一列車ごとに3千人を運ぶ。その列車は有蓋貨車45両、一両当たり荷物と一緒に70人、監視のため前後に一両ずつで編成。持参可能な荷物はわずかとし、マットレスやベットはダメ。外国国籍にユダヤ人は除く。「正確には、イギリス、アメリカ、ポーランド、ロシア、ルーマニア、ブルガリア、スロヴァキア、フィンランド、スイス、スペイン、ポルトガル、それにトル

コの国籍のもの」が移送から除外された（VEJ 15/168）。アメリカ情報機関も協力者を通じて得た情報（5月4－5日会議）をもとに5月18日、ドイツ軍の「ハンガリー占領以降に強制収容所に閉じ込められた30万人ほどのユダヤ人がポーランドに追放され、死に追いやられる見通し」と国務長官コーデル・ハルやダレスに伝えていた。そして、「この事実をラジオでアメリカとイギリスに広め、何らかの形でこの強制移送の計画と実行に参加したものは戦争犯罪者として取り扱われると告知すること」を提案している（VEJ 15:547, VEJ 15/177）。

1944年5月25日と6月1日の間に遂にドイツとハンガリーの政府の間でハンガリーの全ユダヤ人の追放に関する最終的取り決めが行われた。5月25日、外務省ユダヤ人課のエバーハルト・フォン・タッデンはアイヒマンとの打ち合わせの二日後、「約8万人の労働可能ユダヤ人のみが、ハンガリー軍需産業で就業させるためハンガリーに残されるものとする」と記録した。首相ストーヤイも6月1日、閣僚会議に「6月6日、軍団地域からのユダヤ人の移送がミシュコルツとセーケシュフェールバールで開始される。これが終了次第、セゲド、デブレツェン、そして最後にソンバトハイとペーチュカからのユダヤ人移送が始まる。その後にはブダペストの軍団地域が続き、最後にブダペスト地域のユダヤ人が移送される」と。6月10日の第二回ウィーン列車運行会議では、管轄機関が領土中核地域のユダヤ人の移送を調整した（VEJ 15:62）。

ユダヤ人は移送の少なくとも1-2週間前にゲッターから集中収容所に移された。それは筆舌に尽くしがたい暴力的なやり方で行われ、ゲッターの住宅から人々を追い立て、子供をベッドから引きずり出し、「馬のように」殴った。閉鎖工場などに臨時的に設置された集中収容所では当然にも一般的物資の供給も医療も破滅的であった。数多くが屋外で寝なければならなかった。水も便所もまったく足りなかった（VEJ 15:62）。

こうした残酷な様子の情報は外部に漏れだし、内外から批判が出てきた。中立諸国の大使たちから「厳しい批判」が出され、教会からも激しい苦情

が出た。外国の新聞も「異常に批判的」であった。外国新聞の若干の機関紙は、ハンガリー・ユダヤ人の「根絶」に関して重大な残虐行為を告発していた。ユダヤ人が家畜用貨車に押し込められ、封印された貨車のなかでは数多くのものに座席がなく、長い旅の間立ったまま、などと。中立諸国のハンガリーと政府に対する世論は悪化した。いくつかの外国新聞がユダヤ人はポーランドでガス殺され焼き捨てられると報じていた。こうした状況を踏まえて1944年6月21日開催の閣議では「詳しい調査」を行い、閣議記録に付けることになった。ストーヤイは閣議で弁明に努め、自分は「ユダヤ人の引き渡しが人間的諸条件のもとで行われることを重要だと考え、将来もそれを求める」と。イムレーディは閣僚会議に「ユダヤ人の移住と輸送はドイツとの口頭了解で行われ、それについて何かの文書は存在しない」と説明した。すべての責任はドイツにありということなのであろう。内務大臣は、ユダヤ人の移送がドイツの要望で、ドイツの軍事的諸理由から、軍事的安全の見地から行われたことを強調した（VEJ 15/217）。

労働奉仕者5万人をドイツに引き渡す閣議承諾の二日か三日後、1944年4月29日と30日にハンガリーからアウシュヴィッツへの最初の輸送列車が出発した。その際、移送されたのは労働奉仕者ではなく、キシタルツァ（ハンガリー・ブタベスト都市圏ベスト郡）とトポリャの囚人並びにブダベスト監獄の囚人であった。移送ユダヤ人総数3800人の70%以上が到着後直ちにガス室で殺害された。労働のために選別されたものの一部はアウシュヴィッツの貨物駅から郊外ビルケナウ絶滅収容所への引き込み線建設に投入された。この線路延長により、絶滅作戦の円滑な進行が確保されることとなった。何万人もの到着に備え計画の殺害作戦を加速するため、元収容所長ドルフ・ヘスが再びアウシュヴィッツに派遣され、すべての拡張作業が強化された。休止していたクレマトリウムVが再稼働され、数個の焼却壕が掘削された。ゲッターに閉じ込められていたユダヤ人住民のシステムティックな移送は1944年5月15日に始まった。軍事情勢を考慮して国境地域のゲッターが最初の移送列車で疎開させられた。ドイツのデータによ

れば、7月までに437402人が移送された。ゲッター化と移送措置を担当したハンガリー警察のデータ（次官ラースロー・アンドレとラースロー・バキに提出）では、147列車434351人であった（VEJ 15: 63, VEJ 15/242）。

移送されたユダヤ人はアウシュヴィッツ - ビルケナウに運ばれたが、連日到着する輸送列車のあまりの多さに対して十分に準備されてはいなかった。ルドルフ・ヘスの戦後証言では、アイヒマンに総数約50万近くの新来者を受け入れることはできないと抗議するほどだった。移送開始直後、ハンガリーの住民の間ではその目的地についてうわさが飛び交った。外国に輸送されたユダヤ人の運命については、誰も確実なことを知らなかった。さまざまなショック・ニュースが広まった。痩せた者からは人造肥料が作られ、太った者からは石鹼が作られる、などと。「ポーランドではガス室に追い込まれて毒ガスで殺される」といった真実をあらわす噂もあった。事実、32万人以上の男女子供——移送されたユダヤ人の4分の3——がアウシュヴィッツ - ビルケナウ到着直後にガス室で殺された。火葬場のキャパシティが十分ではないので、数多くの死体が第五クレマトリウムのそばに掘られた5つの壕のなかで焼かれた（VEJ 15: 64）。

ビルケナウでの大規模な選別を生き延びたのはわずかにハンガリーからの10万人であった。彼ら生存者はドイツ戦時経済に投入されることになっていた。労働に選別された人間の若干は収容所番号を入れ墨され、アウシュヴィッツ収容所複合体の中にとどめ置かれた。しかしながら、ほとんどのものは登録されなかった。そして、収容所B III地区、あるいはトランジット収容所B IIId並びにBIIcに入れられた。数日のうちにいわゆる^{デポ}寄託囚人はさらに別の収容所に移された。その過半数は地下軍需工場労働で就業することになった。たとえば、ハンガリー・ユダヤ人の第一輸送者はアウシュヴィッツから1944年5月と6月にマウトハウゼン収容所複合体に送られた。該当者は7千人で、その過半数はマウトハウゼン外部収容所で強制労働に投入された。その一人の戦後の回想によれば、「労働は異常に厳しく、食料は劣悪で、もともと肉体労働に成れていたような囚人でも3か月以上は

持たなかった」と。この人物と一緒に投入された19人のうち、生き残ったのは二人だけであった（VEJ 15: 65）。その後の輸送先はブーヘンヴァルト、ダッハウ、ラーフェンスブリュック、シュツウットホーフ、ミッテルバウ - ドラ、あるいはグロース - ローゼンだった。見積もりによれば、1945年春までに500ないし600の収容所で当時のハンガリー領土からのユダヤ人が捕虜として強制労働に配置されていた（VEJ 15: 66）。

ハンガリーからの移送者のごく一部はアウシュヴィッツではなく、オーストリア通過収容所シュトラスホーフに送致された。ここに遣って来た15000人のユダヤ人はウィーン地域の強制労働収容所に入れられた。その場合、家族はほとんどが引き離されなかった。労働能力ありにランクされた男女は農業、工業、あるいは塹壕建設に配置され、子供たちと高齢者は収容所に残ることを許可された。このユダヤ人強制労働者の労働生活諸条件は比較的我慢できるものであった。だがもちろんここでも何千人かの死亡が記録されている。このユダヤ人強制労働者の大部分は1945年春この収容所の疎開の後、ナチス強制収容所複合体へ、例えば強制収容所マウトハウゼン、あるいはベルゲン - ベルゼン、テレージエンシュタットに到達した（VEJ 15: 66）。

12. 非ユダヤ人住民の対独協力と致富

非ユダヤ人住民が反ユダヤ措置の過激化、国内ユダヤ人の集中、そして強制移送に対して示す反応はさまざまであった。ほとんどはユダヤ人の運命に無関心であったが、少なからぬ人が同情を示した。なかには追われる人を助けようとした人がいた。ゲッターに食料を密かに運んだ人もいた。逃亡を、あるいは財産価値や人間さえも隠すのを助ける人もいた。しかし、他方で、住民の一部は当局を積極的に支援し、たくさんの密告が——ドイツ人が驚くほど——行われた。ハンガリー政治警察はユダヤ人財産を隠している人間について連日平均で50ないし60の通報を得た。個々的には私人

が追跡措置に積極的に加担した（VEJ 15: 66-67）。

若干のものはビジネスにおけるユダヤ人競争者の排除、並びに財産剥奪やゲットー化で相当に利益を得た。ハンガリー政府はユダヤ人財産を経済安定化に利用することに努め、追放されたユダヤ人の家や住居を閉鎖し財産価値を登録することを命じた。だが、多くの個人が侵入、住宅占拠あるいはそれに似たことを行って私腹を肥やした。ある薬局経営者は1944年5月17日、次官アンドレに矢印党员と当局によるユダヤ人財産の略奪を告発した（VEJ 15/172）。国家的な組織的やり方が存在しなかったため、地方の行政当局や、私人、あるいはドイツ占領当局が発生したカオスを利用して儲けた。これが繰り返しハンガリーとドイツとの紛争を引き起こした。たとえば、44年7月5日の閣議ではユダヤ人古書店のドイツ語書籍48000冊が親衛隊員によって没収された案件が議題となった（VEJ 15/235）。さらに、親衛隊はハンガリーの指導的軍需コンツェルン・マンフレート・ヴァイス社の半分以上を取得した。この会社の49%は没収措置でハンガリー国家の手に入っていた。親衛隊は残りの51%——非ユダヤ人のコーリン・ヴァイス家の掌中にあった——を手に入れてしまった。それはハンガリー政府にとっては大きな損失であった（VEJ 15/235, VEJ 15/210）。

ユダヤ人住民からの財産剥奪・搾取はゲットーの中でも行われた。ゲットーを管轄する警察は野蛮な尋問方法を用いて秘匿財産価値の情報を探した。特に豊かだとみなされていたユダヤ人が暴力の犠牲になった。婦人は尊厳を失墜させる身体検査にさらされた。産婆が体中を調べたのだ。審問の結果、拷問で何人も死んだ（VEJ 15/206）。

13. 移送の停止

1944年4月、二人のスロヴァキア囚人、ルドルフ・ヴルバとアルフレド・ヴェッツラーがアウシュヴィッツ収容所からの逃亡に成功した。二人はスロヴァキアにたどり着き、詳しい報告書を口述筆記させた。彼らはアウシュ

ヴィッツ収容所の構造と機能、そしてビルケナウにおける絶滅の経過を精密に描き出した（VEJ 16/108、永岑2021）。彼らはこの証拠がハンガリー・ユダヤ人の手に届くこと、「移住地域が実際にはガス室」であることを警告しようとした（VEJ 15: 71）。

1944年4月末ないし5月初めにこの文書はハンガリー語に翻訳され、ハンガリーの3人の司教、ブダペスト救済委員会の会長、それに摂政ホルティの妻に渡された。その上、強制追放開始前にこの文書はハンガリーの指導的代表たち——その中にはハンガリー・ユダヤ人中央評議会議長サム・シュテルンも——の手に届いた。しかし、ヴルバとヴェッツラーの意図に反して、アウシュヴィッツ報告はハンガリーのユダヤ人大衆のなかには広まらなかった。ユダヤ人評議会は予見できない無秩序のパニック反応を非常に恐れ、アイヒマンの言葉——ユダヤ人が協力すれば強制移送になることはない——を信じた（VEJ 15: 71）。

1944年6月、ハンガリー・シオニスト、パレスチナ・ビューロー長のミクローシュ・クラウスがこの報告書をスイスに密輸し、チューリッヒのラビ・タウベス博士の手から神学者カール・バルトに渡し、さらにスイス連邦政府に届いた。彼はヴルバとヴェッツラーの報告書及びブダペスト中央評議会の報告書をもとに、すでに何百万のドイツ、フランス、ポーランド、ロシアのユダヤ人が「とっくに死に追いやられた」こと、その運命がまさにハンガリー・ユダヤ人に迫っていることを伝えた。詳しい説明の最後に、5月15日から6月10日までにハンガリーから335000人が追放された、と（VEJ 15/224）。

外国の新聞の一部でこの報告書が掲載されると、ローマ教皇ピウスXII、アメリカ大統領ローズヴェルト、スウェーデン王がハンガリーからのユダヤ人移送に抗議した。国際的批判に直面してハンガリー閣議も議論し、外務大臣代理が6月24日は「ユダヤ人問題のラディカルな解決の責任は戦後われわれに重く課されることになる」と発言した。6月26日、重臣会議は、一方で7800人のユダヤ人をドイツ本国に送ることは認めつつ、

他方で、ホルティにユダヤ人移送を停止することを要求し、ついに7月6日、「ユダヤ人作戦の継続」をストップした²⁰。この決定はすぐにフェーゼンマイヤーからリッター大使経由の外務大臣宛電報でドイツに伝えられた。ハンガリー政府は、ルーマニアではユダヤ人に対して特別の措置が何も行われておらず、ドイツ政府がユダヤ人問題に比較的寛大であることが許容されていること、スロヴァキアでも何千人ものユダヤ人が残っている——ドイツ政府の承諾の元でティソの保護下にある——こと、さらに摂政やハンガリー政府にユダヤ人問題についての電報、アピール、脅迫などの集中砲火が浴びせかけられていることなどを理由として挙げた（VEJ 15/237）。そのおかげで、ブダペストのほとんどのユダヤ人は国際的世論の視野に入ることになり、ひとまず強制移送から免れた。ホルティの決定は、戦争が連合国軍隊のノルマンディー上陸、赤軍の急速な前進に鑑みてドイツとその同盟国の敗戦が不可避的だとの洞察によるものだった。その上7月2日には、アメリカ空軍によるブダペストへの激しい空爆があり、摂政の決断を促した（VEJ 15: 71）。

ヒトラーは移送停止を激しく批判したが、軍事情勢からしてその再開を強制する手段は持たなかった。ただ、ヒトラーの要求をもとにフェーゼンマイヤー、アイヒマン、親衛隊経済管理本部などは8月半ばになっても、ドイツへの55000から60000人の移送を計画したりした（VEJ 15/265）。アイヒマンと彼の特別コマンドは8月27日から9月18日の期間で移送運行計画を作成したが、その具体化はユダヤ人代表者がホルティに訴え出て、挫折した。8月24日、摂政はフェーゼンマイヤーに対し、さらなる移送は「私の良心に合致しないのでできない」と伝えた（VEJ 15: 72）。フェーゼンマイヤーは電報で外務大臣リッペントロープに、ヒムラーが8月25日、ハンガリー政府との紛争回避のため、ユダヤ人の移送を「直ちに停止せよ」と命じたことを伝えた（VEJ 15/266）。

²⁰ 停止後も、ブダペスト周辺からアウシュヴィッツへの小規模の移送は続いた（VEJ 15/241, 259, 263）。

ヒムラーの決定はルーマニアが枢軸国から連合国に政治的軍事的に態度を変えた文脈で見ることができる。ヒトラー・ドイツはハンガリー政府までもルーマニアの例にならうことを恐れた。事実、ホルティは7月以降先鋭化した政府危機を解消するため、外交情勢を利用した。8月25日、彼はラカトシュ・ゲーザを首班とする内閣を任命した。新政府のもとで反ユダヤの迫害は弱まった。9月29日、特別コマンドは大幅に解体された。だが、ラカトシュ政府はさしあたりはブダペストのユダヤ人を農村部へ移住させることを検討してはみた (VEJ 15: 72-73)。

ハンガリー政府は同時に秘密裏にソ連との休戦交渉を開始した。ソ連赤軍部隊は1944年9月末、トリアノン・ハンガリーの国境に達した。10月6日、ハンガリー代表団はソ連外相モロトフと会い、5日後、ソ連の休戦諸条件に署名した。10月15日、ホルティはついにハンガリー・ラジオで休戦を宣言した。このラジオ放送を聞いたユダヤ人は道路に繰り出し、黄色の星を投げ捨てた。ほかのものは家々に張り付けられた大きなユダヤの星をはぎ取った。ところが、その日のうちにドイツ政府はラカトシュ政府とホルティに退陣を強制した。ホルティにはほんのわずかの抵抗の兆候でもあれば、その前にマウトハウゼン収容所に拉致していた息子を射殺すると脅かした。10月16日、ホルティはハンガリー矢十字党のフェレンツ・サーラシを首相に任命した。サーラシは「総力戦」を宣言し、完全動員を命じた。サーラシの権力掌握の当日すでに矢十字党員によるユダヤ人住民への襲撃が始まった。何かの口実をつけては半時間以内に家を追い出され、まず財布の中身、そして家具、結婚指輪、時計、ナイフ、ランプ、万年筆、鉛筆等が略奪された。武装した矢十字党員による力で血が流され、何百人もが命を奪われた (VEJ 15: 73)。

14. 追放の第二段階 (1944年10月～45年4月)

1944年10月20日、新国防大臣ベレグフィ・カーロイ (姓・名) は、16歳

から60歳のユダヤ人男性に「国土防衛労働」を義務付ける命令を発した。首都の外のユダヤ人はこの時点までにすでに強制移送されてしまっていたので、この措置はもっぱらブダペストに住む約16万人のユダヤ人に対するものであった。フェーゼンマイヤーは同日夕方、ハンガリー軍が22000人を労働奉仕に割り当てたと電報で外務省に伝えた。翌日、残りの16歳から60歳のユダヤ人男性への召集命令と16歳から40歳の全女性への召集命令が出された。国防大臣は10月21日、該当者に対し10月23日に決められた場所への出頭を命じた（VEJ 15/278）。総数で約34000人の男女がブダペスト近辺の取り片付け作業と堡壘作業、壕掘削や木々伐採の労働に投入された（VEJ 15: 74）。

ドイツの帝国（ライヒ）保安本部と外務省はサーラシ政権でハンガリー・ユダヤ人の移送を完了できると期待した。アイヒマンは10月のうちにハンガリーに赴き、サーラシ政府と輸送再開を交渉した。新内務大臣ヴァイナ・ガーボル（姓・名）との会談でアイヒマンはドイツに5万人のユダヤ人強制労働者を「貸し出す」ように要請した。なかでも地下生産労働のため、そしてウィーンへのソ連軍の進撃を防ぐ南東防壁建設のためと。しかし、堡壘作業その他の「緊急課題」の労働力需要はハンガリーにも強く、サーラシはさしあたり25000人を半年間だけ「貸し出す」ことに同意した（VEJ 15/280）。だが、ドイツ外務省はそれでは満足せず、折衝の結果、11月1日になって、さらに25000人のユダヤ人強制労働者がドイツに対して承認された（VEJ 15: 75）。

国防大臣ベレグフィは10月26日、70個の労働奉仕部隊のドイツへの引き渡しを命じた。ブダペスト周辺で10月末に堡壘作業に配置されたユダヤ人、ならびに黄色い星でしるしをつけられたブダペストの家々の手入れで捕まった何千人かのユダヤ人がブダペストのレンガ工場に集められ、11月8日そこから徒歩でオーストリア方向に行進させられた。70個の労働奉仕部隊の大部分はオーストリア・ハンガリー国境に鉄道で到着したが、ブダペストからの民間ユダヤ人の一つの移送は、前線の接近と輸送可能性の欠如のた

め、線路ではもはや不可能だった。残酷な暴力的行進は数多くの人命を犠牲にした。移送者を助けようと国境までやって来たスウェーデン外交代表部の報告では、5人に一人は幾日も徒步行進で疲労困憊して死亡するか、射殺された。死体は埋葬するものなく、路上に放置された。11月21日、フェーゼンマイヤーは本省にドイツへの移送を非常に制限しなければならないと報告するほどであった。ともあれ、サーラシ政府がドイツに引き渡したのは総数76000人を超えていた (VEJ 15/289)。

1944年11月の新たな移送開始とともに諸外国の外交官、ヴァチカン、赤十字などが援助の手を差し伸べ、人命を救おうとし、何千人かは救われた (VEJ 15/283, 284, 292, VEJ 15: 76)。しかし、貨物列車での移送は続けられ、12月1日までに17000人の労働奉仕関係者がオーストリア・ハンガリー国境ないしドイツでの労働配置に運ばれた。そして、親衛隊に引き渡されたユダヤ人の一部は、マウトハウゼン、ラーフェンスブリュック、ベルゲン-ベルゼン、ダッハウなどの収容所に連行された。12月14日にはブダペストからの一移送列車がベルゲン-ベルゼンに到着した。この収容所には解放までに14000人を超えるハンガリー囚人が登録された (VEJ 15: 76)。

1944年冬、ハンガリー政府が親衛隊に引き渡したユダヤ人の一部は、ドイツとオーストリアの工場で強制労働に従事した。残りの男女は南東防壁の建設労働を強制された。とくにこの南東防壁収容所の生活諸条件は破滅的であった。一つの収容所だけで約1800人が発疹チフス伝染病で死んだ (VEJ 15: 77)。

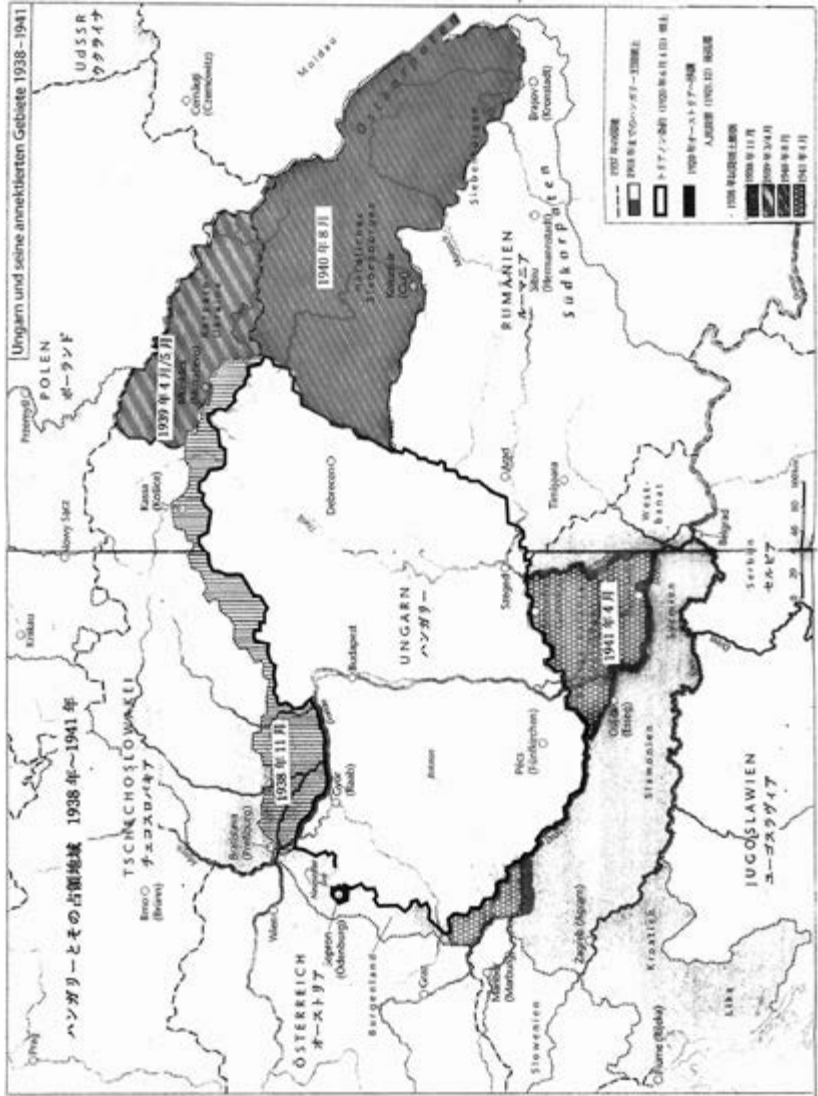
むすびにかえて

1944年12月26日、ソ連とルーマニアの部隊がブダペストを完全に包囲し、45年1月18日、ブダペストに残っていたゲッターを解放した。45年2月13日に赤軍がついに全市を抑えたとき、ブダペストにはまだ12万から14万人

のユダヤ人がかろうじて生き残っていた。サーラシとその支持者は3月29日ハンガリーから逃亡した。彼らとともに約50万人が逃げ出した。4月4日、ドイツ軍の最後の部隊がハンガリー領を去った。

ユダヤ人世界会議のデータでは、終戦後、45年末までに1944年にハンガリー行政下にあった地域に帰還したユダヤ人は116500人であった。ハンガリーが併合した地域から外国に連行されたおよそ30万人以上のユダヤ人のうちで、帰還を果たしたのは116500人のうちの56500人であった。迫害と殺戮を生き延びたハンガリー・ユダヤ人の数は全部で22万から26万人と見積もられている。そのうち、約19万人がトリアノン・ハンガリー領域にいた (VEJ 15: 83)。

永岑 第三帝国敗退最終局面とハンガリー・ユダヤ人の悲劇



文献

(1) 史料：*Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945*, 16 Bde; Bd. 15 (略記VEJ 15) : *Ungarn 1944-1945* . Bearbeitet von Regina Fritz, Berlin/Boston 2021. 引用においてページ数はVEJ 15: **、ドキュメント番号はVEJ 15/**と略記。全16巻の他の巻からの引用も同様。2008年刊行開始から2021年完結までの全16巻の書誌情報は永岑 [2022] 文献リストを参照されたい。

なお第15巻には、全部で7か国語のドキュメントが収められている。そのうち6か国語（ハンガリー語、英語、イタリア語、ヘブライ語、フランス語、スウェーデン語）のドキュメントがドイツ語に訳されている。この巻が全16巻の最後に刊行されることになったことの一因は、この一次史料の多言語性にあるのだろう。その多言語性の背後の厳然たる事実としては、ハンガリーがとりわけ第一次世界大戦から第二次世界大戦において周辺隣接諸国と領土をめぐる紛争を抱え、国際関係・国際的権力状況の変遷、それに伴う領土併合と領土割譲をめぐる複雑な内政外交の闘いの場となったからであろう。

(2) 関連・参照文献リスト（詳細は永岑 [2022] 文献リストを参照されたい。）
Enzyklopädie[1993]des Holocaust. Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden, hrsg. von Eberhard Jäckel/Peter Longerich/Julius H. Schoeps, Berlin.

ヴァンゼー会議記念館編著 [2015] 『資料を見て考えるホロコーストの歴史：ヴァンゼー会議とナチス・ドイツのユダヤ人絶滅政策（横浜市立大学新叢書8）』 山根徹也・清水雅大訳、春風社。

コンツェ、エッカルト/フライ、ノルベルト/ヘイズ、ピーター/ツィンマーマン [2018] 『ドイツ外務省〈過去と罪〉——第三帝国から連邦共和国体制下の外交官言行録』 稲川照芳/足立ラーベ加代/手塚和彰訳、えにし書房。

ジュルコー、ラースロー編 [1985] 『カーダール・ヤーノシュ伝——現代ハンガリー史の証人』 南塚信吾・田中一生・家田修訳、恒文社。

ストーン、ダン [2019] 『野蠻のハーモニー——ホロコースト史学論集』 上 村忠男編訳、みすず書房。

ダワー、ジョン・W [2021] 『戦争の文化——パールハーバー・ヒロシマ・9・11・イラク』 上、下、三浦陽一監訳、田代泰子・藤本博・三浦俊章訳、岩波書店。

テイラー、フレデリック [2022] 『一九三九年——だれも望まなかつた戦争』 清水雅大訳、白水社。

永岑三千輝 [2022] 『アウシュヴィッツへの道——ホロコーストはなぜ、いつから、どこで、どのように』 (横浜市立大学新叢書13、春風社)。

——[2022] 書評『週刊読書人』2022年2月4日：ダニエル・リー『SS将校のアームチェア』 庭田よう子訳、みすず書房。

——[2021] 書評『週刊読書人』2021年11月12日：菅野賢治『「命のヴィザ」言説の虚構——リトアニアのユダヤ難民に何があったのか?』 共和国。

——[2019] 書評『週刊読書人』：2019年7月19日：ニコラス・チェア/ドミニク・ウィリアムズ『アウシュヴィッツの巻物——証言資料』 二階宗人訳、みすず書房。

——[2021] 「第三帝国の全面的敗退過程とアウシュヴィッツ——1942 - 1945」『横浜市立大学論叢』 社会科学系列、73-1。

野村真理 [2008] 『ガリツィアのユダヤ人——ポーランド人とウクライナ人のはざままで』 人文書院。

——[2013] 『隣人が敵国になる日——第一次世界大戦と東中欧の諸民族』 人文書院。

ハウマン、ハイコ [1999] 『東方ユダヤ人の歴史』 平田達治・荒島浩雅訳、鳥影社。

羽場久み子 [1982] 「ハンガリー革命における国家機構——タナーチ (評議会) 権力の構造, 1919年——」『スラヴ研究』 30。

パムレーニ、エルヴィン編 [1980] 『ハンガリー史（増補版）』 1、2、田代文雄・鹿島正裕訳、恒文社。

ヒルバーグ、ラウル [1997] 『ヨーロッパ。ユダヤ人の絶滅』 上、下、望田幸男・原田一美・井上茂子訳、柏書房。

フリードランダー、ソール [1994] 『アウシュヴィッツと表象の限界』 上村忠男・小沢弘明・岩崎稔訳、未来社。